

(仮称) 苫小牧市民ホール建設基本計画 (案)

資料編

苫小牧市

資料編

これまでの検討経緯————— (1)

事業アイデア集————— (19)

市民参加事業————— (87)

利用団体へのアンケート結果———— (95)

用語集————— (103)

これまでの検討経緯

- (1) (仮称) 苫小牧市民ホール建設検討委員会及びワーキンググループの議論内容
- (2) 市民参加事業について

これまでの検討経緯

(1) (仮称)苦小牧市民ホール建設検討委員会及びワーキンググループの議論内容

【平成28年度】

● 第1回検討委員会

日時：平成28年7月4日(月)13時30分

場所：本庁舎2階21会議室

第1回検討委員会では、検討委員会の委員及びワーキンググループメンバーが一堂に会し、基本構想と基本計画の役割や重要性について確認をしました。

まず、基本構想は、建物の計画や設計を具体的に進めるためのガイドライン^{注26)}としての役割を持っていること、また、基本計画は、価値基準となる基本構想を基に建物の具体的な設計を行うための条件整理としての役割を持っていることが示されました。

なお、既存施設の建替えではなく、数十年先の将来を見据えた「新しい」複合施設を検討するため、機能ごとのワーキンググループを設置することが確認されました。

● 第1回合同ワーキンググループ

日時：平成28年7月4日(月)14時40分

場所：本庁舎2階21会議室

第1回ワーキンググループは、活動、鑑賞、展示・窓口の合同で開催され、各メンバーが新たな複合施設に期待することについて自由な意見が交わされました。

活動グループでは、人口17万人の苦小牧市に適正な規模と、市民のための施設になることへの期待が寄せられた他、高齢者や若い世代にとってのサードプレイスの現状が議論されました。鑑賞グループでは、苦小牧にはここがあると思える施設や、多様な活動をしている市民がお互いを知り、受け入れ合うような場にしたいという意見が出されました。展示・窓口グループでは、特定の趣味を持たないような人も自然に集まれるような仕組みを考えること、人材育成や事業企画を検討することの必要性が確認されました。

注26) 政策や施策、事業などを遂行するための指針や指標。基本構想は価値基準となるもの。(英語：guideline)

● 第2回 検討委員会

日時：平成28年8月1日（月）14時00分

場所：本庁舎9階会議室

各ワーキンググループのリーダーより、各部会で議論された内容についての報告がありました。具体的な活動や事業のアイデアと、それを実現・実行するための運営形態をセットで検討すること、様々な選択肢がある中で、何を価値観として共有し、事業や活動を実行するのかという点について明確にしながらか議論することの重要性が確認されました。

● 第2回 活動ワーキンググループ

日時：平成28年8月16日（火）14時00分

場所：本庁舎2階21会議室

平成28年6月に実施した、市内での芸術・文化活動団体へのアンケート調査の結果報告を行いました。また、事業アイデアの検討においては、家の中に閉じこもりがちなお子どもたちを遊ばせる場所になること、市内に数多くいるクラフトや衣服などの作家が活躍できる場所になること、市内で育った若手の演奏家や芸術家が気軽に演奏会や展示会などを開催できる場所になることを目指す必要性について議論されました。

● 第2回 鑑賞ワーキンググループ・第2回 展示・窓口ワーキンググループ

日時：平成28年8月22日（月）13時30分

場所：本庁舎9階会議室

平成28年6月に実施した、市内での芸術・文化活動団体へのアンケート調査の結果報告をした後、各グループに分かれて事業アイデアを議論しました。

鑑賞グループでは、それぞれのメンバーが情報を集めた市内外における活動事例の紹介を行い、企画から公演までを一から市民でつくりあげるイベントの実施、演奏者・鑑賞者の両者を育てるサークルの取組、ジャンルや世代間交流を促す仕組みの必要性などについて議論されました。

展示・窓口グループでも同様に、市内外における活動事例の紹介を行い、窓口機能の役割として、市内の活動が一度に把握できる情報拠点となること、市内で活動する様々な団体や個人の協働を促し、新たな活動へ展開できるような仲介役となることが挙げられました。また、展示機能については、既存の展示空間とは異なり、写真展と写真教室を連動させ、笑いと書道展示を組み合わせるなど、体験型で動的な展示のあり方を提案したいという意見が出されました。

● 第3回 鑑賞ワーキンググループ

日時：平成28年9月16日（金）13時30分

場所：本庁舎2階21会議室

基本構想において、検討委員会での議論内容をキーワード別にまとめていますが、第2回～第6回ワーキンググループでは、このキーワードに基づき、具体的な事業アイデアを検討しました。基本構想で掲げている理念を実際に事業として展開し、また設計にも連動させるための重要な議論となりました。

1度のワーキンググループで、3～4つのキーワードを取り上げ、事業アイデアをまとめているため、各回に取り上げたキーワードと議論内容を示します。

「アウトリーチ^{注27)}」と「圏域^{注28)}」をキーワードにした事業アイデアの検討が行われました。

「アウトリーチ」については、市民が文化・芸術活動に関心を持つきっかけづくりとして、チケット販売システムの工夫や、プロと市民が一緒に楽しめるイベントなどのアイデアが出されました。「圏域」では、市内既存施設との連携をはかった予約サービス、新しい施設独自のコンクールを設けるといった提案がありました。

● 第3回 展示・窓口ワーキンググループ

日時：平成28年9月16日（金）13時30分

場所：本庁舎2階21会議室

「リピーター^{注29)}」と「日常的利用」をキーワードにした事業アイデアの検討が行われました。

「リピーター」については、施設での活動に関心を持ってもらうための工作と演劇を結びつけた企画、何度も足を運びたいくなる会員システム、施設に愛着を持てるようなプログラムが提案されました。また、「日常的利用」については、独自の企画を発信するカフェや図書室の設置、展示室を市民自らが創り上げることのできる空間のイメージを共有しました。

● 第3回 活動ワーキンググループ

日時：平成28年9月26日（月）14時00分

場所：本庁舎2階21会議室

「地域活動」と「共用空間」をキーワードにした事業アイデアの検討が行われました。

「地域活動」については、自分のまちをテーマにした壁新聞の作成、子どもたちを地域全体で支援するための基金などのアイデアが出されました。「共用空間」については、既存の活動を連携させるイベントの開催、アマチュアでもソロデビューができるような機会の創出、市民によるマネジメント組織^{注30)}などの提案がありました。

● 第3回 検討委員会

日時：平成28年9月29日（木）14時00分

場所：本庁舎9階会議室

検討委員会とワーキンググループの役割について、検討委員会は各グループから出た議論をチェックするだけでなく、全員で理解し合いながら、より質の高い事業アイデアとするためにしていくことを共通認識として確認しました。

ワーキンググループからの報告では、議論の内容を具体的な事業アイデア集としてまとめたものを発表しました。多岐に渡る豊富なアイデアをまとめる際、「育てる」「知る」「関わる」「つなぐ」「集う」の5つの事業に分類できるのではないかという意見が出されました。

注27) 施設内にとどまらず、自ら施設などに出向かない人々に対し、芸術文化に関心をもたせることを目的として、普及活動や育成事業などを行い、裾野を広げること。（英語：outreach）

注28) 作用などの及ぶ一定の範囲。例えば市内の他施設との役割分担や連携について、また利用者が訪れる範囲などを検討する際に考慮する。

注29) 何度も繰り返し利用したり訪問したりする人。（英語：repeater）

注30) 管理運営組織。（management）

● 第4回 活動ワーキンググループ

日時：平成28年10月11日（火）13時30分

場所：本庁舎9階会議室

「余暇環境」と「フレキシビリティ^{注31)}」をキーワードにした事業アイデアの検討が行われました。

「余暇環境」では、仕事帰りの市民が立ち寄ることのできる時間設定について議論され、毎日だけでなくも夜間開放する企画、屋外空間を使いこなす運営などが提案されました。「フレキシビリティ」では、具体的な利用者や活動が想定されていないと可動間仕切りの設置やマルチスペースは、無目的な空間になる恐れがあるため、世代ごとのテーマを設けた空間の想定について話し合われました。

● 第4回 鑑賞ワーキンググループ

日時：平成28年10月18日（火）13時30分

場所：本庁舎2階21会議室

「無目的利用」と「定常・定期利用」をキーワードにした事業アイデアの検討が行われました。

「無目的利用」については、普段施設に訪れることのない市民へのきっかけづくりとして、とまちポップポイント^{注32)}と連携したポイントシステムや、施設に行けば手に入る市民情報などの発信について議論されました。「定常・定期利用」では、施設の空き部屋を有効活用するシステムや複合予定である交通安全センターを想定し、交通安全などの啓発活動を文化活動と併せて行うアイデアが出されました。

● 第4回 展示・窓口ワーキンググループ

日時：平成28年10月18日（火）13時30分

場所：本庁舎2階21会議室

ゲストスピーカーとして、北海道新聞「とまこむ」の編集者を招いて企画の立て方、情報発信についてお話を聞きました。常にアイデアを検討し続けること、同じ対象でも様々な角度から見ると異なる企画が生まれること、過去ではなく未来の情報を届けることの重要性について議論されました。

注31) 柔軟性や融通性。例えば、目的や用途に応じて部屋が可変したり、利用区分に幅を持たせたりするなどの柔軟な対応を目指すこと。(flexibility)

注32) 市内の「とまちポップポイント加盟店」での買い物をした際や、市の事業やイベントに参加した際、また公共施設を利用することで貯まるポイント。

● 第4回 検討委員会

日時：平成28年11月2日（水）14時00分

場所：本庁舎2階21会議室

ワーキンググループからの報告として、具体的な事業アイデア集を発表しました。「現実的にこのアイデアでは難しい」ではなく、「本来はこういったことができるといい」という発想でアイデアを出し、それらを公共施設で行う意義と、実現するための工夫を検討することの重要性について意見が出されました。また、これまでに提案された事業アイデアを「育てる」「集う」「知る」「関わる」「つなぐ」に分類した資料をもとに、各種の事業連携を意識した検討を積み上げていく必要性について確認しました。

● 第5回 鑑賞ワーキンググループ

日時：平成28年11月9日（水）13時30分

場所：本庁舎2階21会議室

「ついで利用」と「フレキシビリティ」をキーワードにした事業アイデアの検討が行われました。

「ついで利用」としては、食と関連づけたイベントや体験の企画、入ってみたい、参加してみたいと思えるような工夫のあるサイン（施設内の案内標識）やサイネージ（電子看板）の計画、施設を介して市民のモノや情報を交換できる拠点になるといったアイデアが議論されました。「フレキシビリティ」については、子どもが雨の日にも遊べるような場所にすること、演奏者と観客の距離を縮めるようなホワイエの使い方、思春期の子どもたちと親をつなぐ試みについて議論されました。

● 第5回 展示・窓口ワーキンググループ

日時：平成28年11月9日（水）13時30分

場所：本庁舎2階21会議室

「情報発信」「居場所・居心地」「雰囲気づくり」をキーワードにした事業アイデアの検討が行われました。

「情報発信」については、イベント情報だけでなく演者の素顔に迫るような記事を載せた広報誌、子ども記者クラブの結成、情報拠点センターとなるようなプログラムが提案されました。「居心地・居場所」については、大人が非日常を味わえる居場所づくり、子どもたちが安心して過ごせる場所などの必要性が挙げられました。「雰囲気づくり」では、利用者と窓口、職員同士の距離を縮める事務室の作り方について意見が出されました。

● **第5回 活動ワーキンググループ**

日時：平成28年11月14日（月）13時30分

場所：本庁舎2階21会議室

「創作環境」と「管理運営組織」をキーワードにした事業アイデアの検討が行われました。

「創作環境」については、世代間交流の実現や、予約なしで気軽に創作できる環境、食に関する社会貢献事業の展開が期待されました。「管理運営組織」については、指定管理者制度の場合、創造的な運営企画や市民との協働が不可欠であること、市民ボランティアが携わる際には、やりがいのある仕事として認識できるかどうか等重要であるという意見が出されました。

● **第6回 活動及び展示・窓口ワーキンググループ**

日時：平成28年12月19日（月）13時30分

場所：本庁舎2階21会議室

「まちづくり」と「機能連携」をキーワードにした事業アイデアの検討が行われました。

既に市内各地にある小さなグループでの文化活動が互いに連携することでまちづくりに関わる活動へと発展することや、文化芸術活動をきっかけとして、結果的にまちづくりに関わる活動に参加している仕掛けのアイデアが出されました。また、家庭料理なども身近な文化の継承であり、新しい施設で目指すべき視点として提案されました。なお、自動車移動を要する市の地形や交通網を考慮し、交通手段をセットにしたイベントや企画の有効性が議論されました。

● **第6回 鑑賞ワーキンググループ**

日時：平成29年1月20日（金）13時30分

場所：本庁舎3階会議室

「まちづくり」と「機能連携」をキーワードにした事業アイデアの検討が行われました。

市内での子育て環境の課題などを踏まえ、子どもの成長に果たすまちづくりの役割が議論され、新しい施設を子どもの居場所とするような事業が提案されました。また、施設内での活動に留まらず、既存のイベント会場と連携することや、中心市街地を文化芸術拠点として役割転換し、市内全体で活動が展開されるための工夫が話し合われました。

● 第5回 検討委員会

日時：平成29年1月23日（月）14時00分

場所：本庁舎9階会議室

ワーキンググループからの報告として、事業アイデア集が紹介されました。近年の公共施設の建設において、発注者側が具体的な活動のイメージを出さなければ、設計者側は設計提案の拠り所をなくしてしまうという点が挙げられ、基本計画における事業アイデア集の重要性が強調されました。新しい施設が目指しているのは、既存施設の面積を単純に確保することではなく、基本構想やそれに基づく事業アイデアの実現であり、そのために丁寧な議論を重ねていることが確認されました。

市民ホール建設地に係る比較検討においては、まず、市内広域での立地検討について、中心地だけでなく端部にも候補があるか否かの確認がありました。また、基本構想の方針を鑑みた際、オープンスペース^{注33)}の確保のしやすさが重要であるという意見が出されました。さらに、利用者数の規模や圏域を想定した面積の検討の必要性について議論されました。今後も、比較する際に重要となる項目を増やして検討を継続することが求められました。

● 第7回 合同ワーキンググループ

日時：平成29年2月22日（水）13時30分

場所：本庁舎2階21会議室

平成28年度の議論の振返りとして、事業計画の体系図が示され、各グループで出された意見の中から共通している項目や重要視されてきたことについて整理しました。

活動グループでは、「プロ・セミプロ^{注34)}との協働による文化力の向上」、「具体的な年齢層や使い手を意識した検討」、「市民の要望を着実に実現できる環境整備や仕組み」といったように、現在実施されている活動の中での実感にもとづいた検討を行ったことが報告されました。

鑑賞グループでは、「施設の建設を契機とした芸術文化活動の活性化」、「芸術文化活動を通じた交流・仲間づくり」、「施設全体・市全体で活動を展開していくための必要性」といったように、文化芸術活動の特性を生かした事業アイデアについて検討を行ったことを報告しました。

注33) 都市や敷地内で、建物の建っていない土地や空地。建物外部は市民が気軽に訪れやすく、様々な企画を実行できる重要な場所。（英語：open space）

注34) プロとはプロフェッショナルの略で、専門家や本職としてその活動を行う人。セミプロとはセミ・プロフェッショナルの略で、本職ではないが、それに準ずる技芸を持つ人。（英語：professional, semi-professional）

展示・窓口グループでは、「継続的な来訪を促す工夫や仕掛け」、「具体的な使い手や場所を想定した検討」、「全市民の施設利用を促進する公共交通や広報との組み合わせ」といったように、施設が日常的に利用されるための仕掛けや工夫について検討を行ったことを報告しました。

平成 29 年度は、豊富な事業アイデアとそこで議論された内容を受け、それらを実現するための建物の諸条件をまとめていく作業が行われることと、その際に検討委員会とワーキンググループが合同でデザインワークショップ^{注 35)}を実施する予定であることを示しました。

●● 第 6 回 検討委員会及びワーキンググループ合同会議

日時：平成 29 年 3 月 22 日（水）14 時 00 分

場所：本庁舎 2 階 21 会議室

平成 28 年度の議論の振り返りとして、事業計画体系図の確認と事業アイデア集の確認が行われました。また、平成 29 年度より取り掛かる事業計画に基づいた設計条件の検討方法を確認するため、各グループの具体的な事業アイデアを例に、空間イメージを議論しました。

活動グループでは、各地のコミュニティセンターや自宅などで行われている小規模な活動が共用空間に一堂に会するというアイデアより、共用空間のイメージについて意見が交わされました。ここでは、外部と内部の空間が効果的に利用されるような屋外オープンスペースや、庇の有効性について意見が出されました。

鑑賞グループでは、公演の後にホワイエ^{注 36)}で演者や観客を交えた交流を行うというアイデアより、ホール、ホワイエ、ロビー^{注 36)}の連続性について話し合われました。ホール内部のイメージに留まらず、外部空間とのつながりや、配線や設備の重要性、飲食可能にするためのレストランやカフェとの位置関係など、具体的なイメージが出されました。

展示・窓口グループでは、利用者が施設で植物を育てていき、それらの観察結果や育成過程を展示するアイデアや図書室でイベントや他の活動と連動した展示が行われるというアイデアより、展示空間と外部空間、カフェとの隣接といった場所の関連性についての意見が出されました。また、本棚や椅子などの家具についても重視する点として挙げられました。

最後に、事業計画の検討が、空間計画の条件提示へ連動する実感を共有し、引き続き活発な議論を交わすことが確認されました。

【平成 29 年度】**●● 第 1 回 検討委員会及びワーキンググループ合同会議****日時：**平成 29 年 6 月 26 日（月）13 時 30 分**場所：**本庁舎 9 階会議室

第1回検討委員会では、平成 28 年度の成果として、63 個の事業アイデアを作成し、それらを事業計画体系図にまとめ、事業方針を整理したことが確認されました。平成 29 年度は、土地利用、規模計画、内部の仕様などの計画という順番で検討することが示されました。

まずは、現市民会館と市の方針として候補地として示されている現東小学校敷地の周辺環境の特徴や課題についてグループディスカッション^{注37)}を行いました。車でのアクセスについては、国道 36 号線からの右折ができないため住宅地を迂回する必要があること、駐車場の出入り口の混雑、駐車場の不足と駐車場所の分散などが課題として挙げられました。また公共交通機関や徒歩でのアクセスについては、バスの時間が限られること、バス停から見えにくい場所にあること、警察署の西側などは暗くて一人歩きには不安があることなどが指摘されました。カルチャーストリートは歩行空間として整備されているため、徒歩でアクセスする人が増えるような公共交通のルート設定などが求められました。

次に、グループに分かれて敷地全体の土地利用を検討しました。各グループの案には共通点が多くみられ、アクセス・アプローチ^{注38)}については、車が左折のみで安全に進入できること、出入り口の数を調整することで混雑を緩和することが挙げられました。また、歩行者の散歩コースとなるように、既存の遊歩道を生かすこと、搬出入の車両と一般車両、歩行者の動線を分けることが重要視されました。土地利用については、東側に建物、西側に駐車場を配置することで、周囲の住宅へ

注 35) ワークショップとは、参加者全員が自ら経験を披露したり作業をしたりして、参加者同士の相互作用による学びと創造の方法。ここでいうデザインワークショップとは、特に建築の設計を具体的に想像しながら、問題の解決や新たな価値を思考し、互いに概念を組み立てること。(design workshop)

注 36) 劇場やホールなどの出入りの多い施設で、出入口と客席部分の間にある廊下、休憩所、応接間などを兼ねる広間。特にもぎり位置よりも客室側をホワイエ、外側をロビーとする。(英語：lobby、フランス語：foyer)

注 37) あるテーマについて、少人数のグループで行う討議。個人が意見を出しやすく、それらをグループ内で相互確認できる点で効果的な手法。(英語：group discussion)

注 38) アクセスとは、敷地へ至るまでの通路や交通の便。アプローチとは、道路や門から建物の出入口までの通路又は導入空間。(英語：access, approach)

景観上の配慮をすること、駐車場を現市民会館の敷地と併せて利用することの可能性についても検討されました。また、既存の市民会館前のオープンスペースや、東小学校の樹木を生かして一体的に連続させることが提案されました。

●● 第2回 検討委員会及びワーキンググループ合同会議

日時：平成29年7月24日（月）13時30分

場所：本庁舎9階会議室

第2回検討委員会では、はじめに、第1回検討委員会で各グループで議論した土地利用に関する内容をまとめ、事務局としての配置案が示されました。次に、ホールや会議室、展示室や事務室など、複合施設が持つ4つの機能（活動・鑑賞・展示・窓口）の割合を考慮しながら、建物の立体的な配置をグループに分かれて検討しました。

エントランスホールについては、外部のオープンスペースに面して一体的に利用することや、カフェを隣接させることで、施設の利用者だけでなく通りがかった人やカフェ利用者が気軽に施設を訪れることができるという意見が挙がりました。また、ホールのホワイエの配置についても、ホール利用者の動線を分け、混雑を緩和させることへの配慮が必要であることが確認されました。展示スペースや図書スペースを通路となるような共用（コラボ）スペース^{注39)}と一体にすることで、様々な人が関心を持つ機会が増えるというアイデアや、子どもが安心して遊べる賑やかな場所と、鑑賞の余韻に浸るような静かな空間を分ける必要性なども議論されました。また、ホールに直行できるような練習室を設けること、鑑賞スペースと活動スペースを兼用する多目的室や、会議室よりも練習室等の多目的室を充実させることなど、普段の利用状況に即した具体的な提案がありました。

注39) コラボレーションスペースの略。異なる分野の人が協力し、共同で創造する場。ただ通過するだけの共用空間ではなく、「活動」「鑑賞」「展示」「窓口」といった各機能が積極的に交わる場として用いる語。(collaboration space)

●● 第3回 検討委員会及びワーキンググループ合同会議

日時：平成29年11月6日（月）13時30分

場所：本庁舎9階会議室

第3回検討委員会では、議会で報告された予算や敷地面積の検討を踏まえて算出された延床面積の目安と、第2回検討委員会での議論に基づく事務局案として、各機能に求められる必要面積と割合、諸室の統合案が示されました。続いて、各機能の面積割合を反映させたモデル図面を参考に、「活動」「鑑賞」「展示・窓口」のグループに分かれて、それぞれの部屋の雰囲気や共用（コラボ）スペースとの関係について、具体的なイメージを持ちながら検討しました。最後に、ホールの座席数について、既存の利用状況や、基本構想を実現できる面積割合を考慮しながら議論しました。

活動スペースでは、音の聞こえ方や見え方などを考慮し、活動の性質に応じたまとまりをつくること、部屋の接続方法の工夫により様々な活動団体の需要や利用に応えるという提案がありました。鑑賞スペースでは、多目的用途の大空間や楽屋について活動スペースを積極的に活用すること、ホールとコラボスペースの関係性を築きやすい配置を検討することが求められました。展示・窓口スペースでは、雰囲気の異なる2つのカフェや相談しやすい窓口を設けることなど、気軽に訪れることのできる施設を意識した提案がありました。なお、特にコラボスペースとの関係として、目的に合わせた柔軟な利用が求められました。

座席数については、現状の市民会館の規模相当を求める声と、施設全体のコンセプトに応じた面積配分や、人口規模に見合った席数の設定を求める声が挙がりました。様々な規模や用途に対応するためには、例えば1階と2階を分けたり、時間区分を見直したりすることで、料金設定を低くするという提案が出されました。また、市民利用を優先した規模の検討をすること、楽屋の使い勝手の改善についても言及されました。

●● 第4回 検討委員会及びワーキンググループ合同会議

日時：平成 29 年 11 月 28 日（火）13 時 30 分

場所：本庁舎 2 階入札室

第 4 回検討委員会では、これまでの議論を踏まえた基本計画案を提示し、その内容を説明すると共に、各章ごとにその内容について確認しました。また、管理運営計画に関わる議論として、他施設の特徴的な管理運営について事例紹介をし、今後の管理運営計画策定へ向けて検討すべき事項を確認しました。

(2) 市民参加事業について

基本計画策定に際し、検討委員会やワーキンググループでの議論に加え、より多くの市民の理解を得ること、また幅広い市民の考えを反映させることを目的に、市民フォーラム、事業紹介展示、公開ワークショップを実施しました。

● 市民フォーラム

日時：平成 28 年 10 月 23 日（日）14 時 00 分～17 時 00 分

場所：市民会館小ホール

「未来の憩いの広場、市民ホールを考えよう～新しい複合施設を目指して～」と題する市民フォーラムを開催しました。

基本構想で掲げる新しい施設の考え方について、市民と共有する機会として、可児市文化創造センター館長兼劇場総監督の衛紀生さんをお招きし、全ての市民に開かれた「公共劇場」のあり方の講演を頂きました。市長やワーキンググループメンバーとのパネルディスカッションを通じて、劇場を社会包摂拠点として捉えること、常識を打ち破ることで文化芸術から縁遠い市民がリピーターになること、市民やまちにとって果たすべき役割を真摯に考えることの重要性が語られました。参加者からは、「公共施設の概念が変わった」「もっと多くの市民に聞いてもらいたい」という意見が挙がりました。

● 事業紹介展示

日時：平成 29 年 6 月 3 日（土）10 時 30 分～18 時 00 分

場所：イオンモール苫小牧 1 階ウエストコート内特設スペース

基本構想・基本計画、建設地に係る市の考えなどについて広く市民に周知するイベントを開催しました。会場は、イオンモールとし、より幅広い年代の市民に関心を持ってもらえるよう、検討委員会及びワーキンググループで作成している 63 の事業アイデアをパネル展示し、現市民開館周辺の模型を展示しました。

約 600 人の市民の参加があり、特に子どもと大人が共に楽しめる事業に関心が集まり、「食」も文化であるという考え方に共感が得られました。

● 公開ワークショップ

日時：平成 29 年 10 月 21 日（土）14 時 30 分～17 時 00 分

場所：COCOTOMA ラウンジ

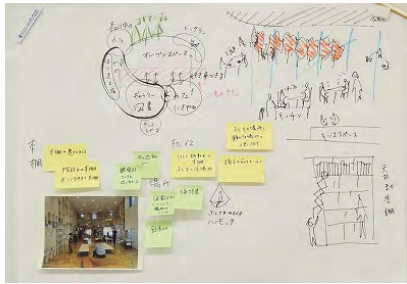
これまでの基本構想や基本計画の検討経緯を紹介すると共に、市民ホールが目指すサードプレイスについての理解を深めるため、市民ワークショップを開催しました。

ワークショップでは、事業アイデアの課題や発展性を話し合い、その後、具体的なアイデアを実現する部屋や雰囲気について議論しました。例えばとまチョップポイントと連動した事業アイデアについて、それらを貯める場所と使う場所のイメージが具体化しました。また、モノづくりの場やカフェについて、周りの部屋や他の活動とつながる工夫が挙げられました。さらに、子どもの活動を支える事業について、練習と発表の場の性質の違いや保護者や通りがかった人も関心を持つつくり方などについて提案がありました。

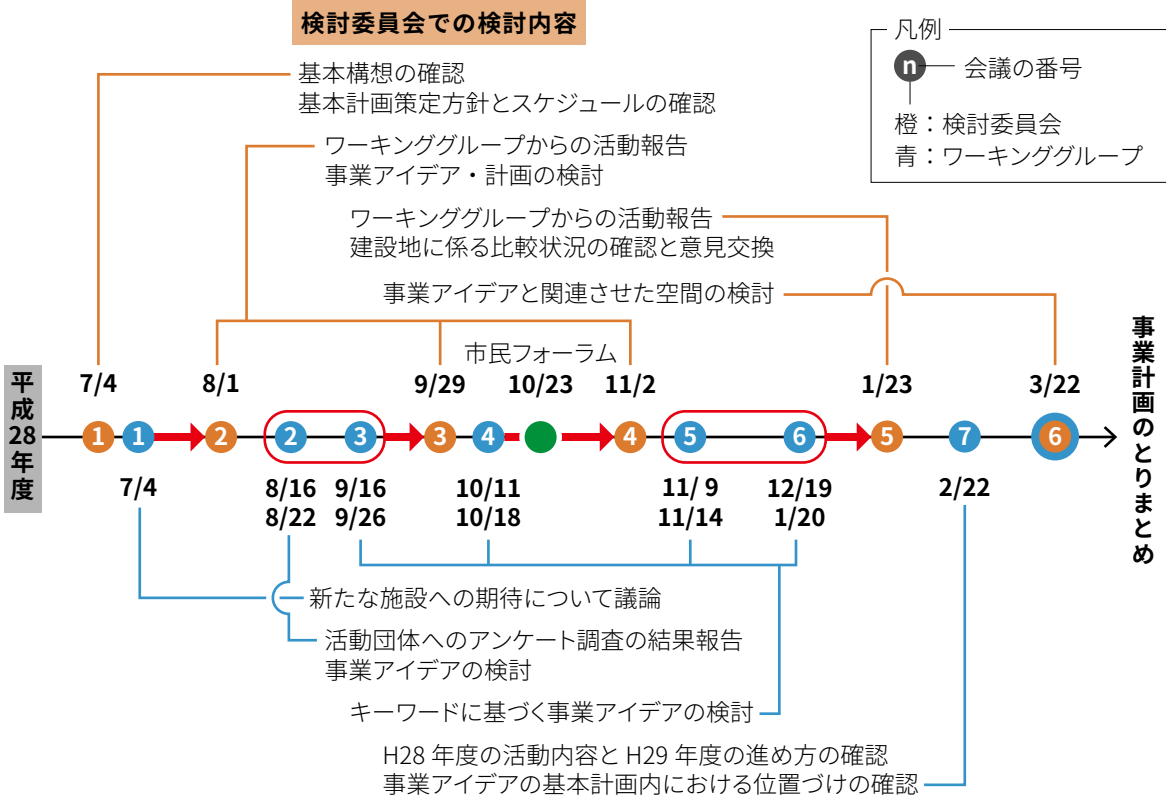
特に中高生の参加が多く、日頃ホールを利用し、また文化活動をしている市民と議論する機会となりました。



検討委員会の様子



第6回検討委員会の成果例



ワーキンググループでの検討内容



活動ワーキンググループの様子



鑑賞ワーキンググループの様子

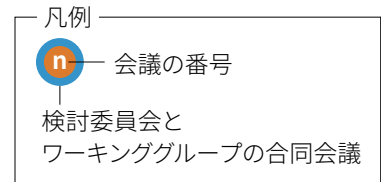


展示・窓口ワーキンググループの様子

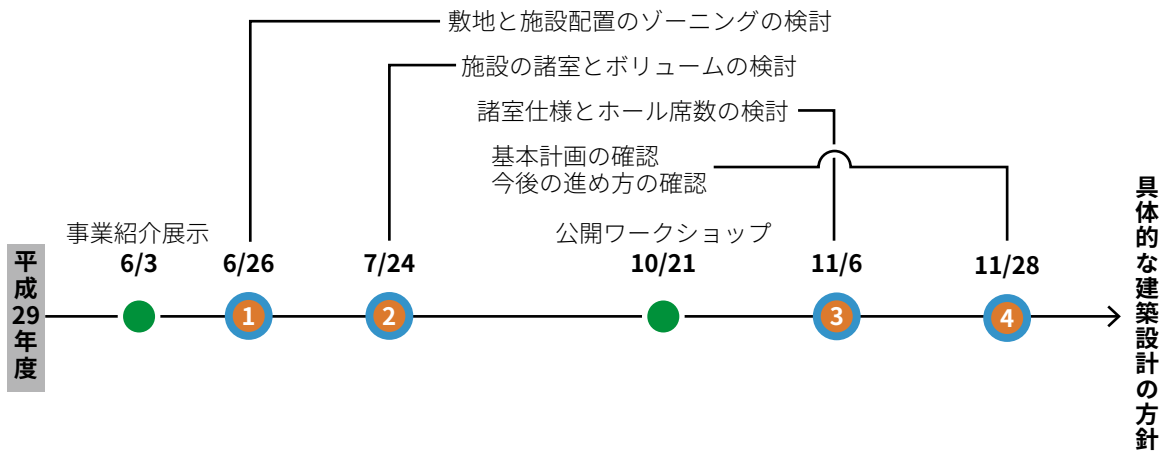
図 1-3 平成28年度の検討経緯



第1回合同会議の様子



合同会議での検討内容



第1回合同会議の成果例



第3回合同会議の成果例



第2回合同会議の成果例

図1-4 平成29年度の検討経緯

事業アイデア集

4つの機能にまつわる基本構想のキーワード一覧

■ 共用空間

多目的に使われる共用空間の可能性を追求し、にぎわいや利用頻度を高めていく必要がある。

■ 地域活動

市外の人たちを呼び込むことに注力するよりも、地元市民のための施設づくりや地元に関わった活動を展開していく。

■ 余暇環境

仕事帰りに施設を使えたり、お金をかけずとも利用できたりといった余暇活動のための環境整備が重要である。

■ フレキシビリティ

特定利用の占有化を避け、全体的な利用やマネジメントといった諸室の柔軟性を確保していく。

■ 創作環境

展示や学習といった柔軟性のある機能による連携の一つとして、市民自らが能動的に創作できる場が期待される。

■ 管理運営体制

市民に施設を使ってもらえるために、柔軟な運営組織体制や仕組づくり・仕掛づくりが必要である。

■ 圏域

札幌や周辺都市の中での施設の位置づけを明確にする必要があり、苫小牧での圏域の考え方を定めていくべきである。

■ アウトリーチ

これまで施設を利用してこなかった市民に対しての働きかけを積極的に行うのが良い。

■ まちづくり

市域全体のまちづくりや都市計画と連携し、広域的な視点での検討を重要視していく。

■ 定常・定期利用

常に一定の利用が見込める使われ方は、施設のにぎわいを創出したり、ついで利用を促したりすることができる。

■ ついで利用

ふらっと行くとイベントが開催されていたり、何かのついでに施設を利用したりといった使われ方を重視していく。

■ リピーター

市民が何度も足を運びたくなる場所づくりや仕掛けづくりを重要視していく。

■ 日常的利用

施設において人の気配やにぎわいは重要であり、日常的な利用者があることで目的がない人でも安心してそこに居られるようになる。

■ 情報発信

興味・関心の度合いが低い市民や遠くに住んでいる市民に対する情報発信の仕方や工夫を考える必要がある。

■ 居場所・居心地

気軽に利用できる市民の居場所は公共施設が積極的に担っていくべき要素である。

居心地のよさが居場所にとって重要であり、自由に何かができるといった気軽さや多様な使われ方を追求する。

■ 雰囲気づくり

公共施設だからこそきめ細やかな対応が重要であり、スタッフによるおもてなしの姿勢や態度を重要視すべきである。

■ 無目的利用

目的がなくとも訪れることができる施設づくりを目指すべきである。

「ソロデビューへの道」

趣味で始めた活動が日の目を見る機会を提供するプログラム



事業内容

新しい施設では、初心者でも気軽に趣味として文化・芸術活動を始め、それらを広く披露する環境をつくれます。例えば、最初は共用空間にてグループ展示に出展したり、フリーコンサートで来訪者の反応をみたりして腕を磨きます。その後、施設が主催する講習会やワークショッププログラムなど、いくつかの定められたメニューに参加し試験に合格すると、ギャラリーで個展を開く、ホールで演奏できるなど、少しずつレベルアップしていることを実感する環境での発表が可能となります。プロでなくても、いつかこの施設でソロデビューができるかもしれないというモチベーションを高めるプログラムです。

実施することで得られる効果・可能性

初心者でも気兼ねなく活動を発表できる場所を提供しながら、継続的な活動につなげ、文化・芸術活動の裾野が広がる

実現する上での課題

市民の活動がステップアップしていく講習会やワークショップの実施主体

「じわじわキャンペーン」

開館前からプロの公演で文化を育てていくイベント



事業内容

これまで芸術文化活動に関心のなかった市民がそれらの活動に興味を持つためには、まずはプロの公演を体験し本物の感動を味わうことが重要です。そのため、新しい施設の開館前からイベントとしてプロの公演を市内各地で行っていくことで、市民が文化芸術活動に親しむ機会を創出することや、新しい施設への期待感を高めることにつながります。また、このプレ企画は、単に市民の文化芸術活動への素地を育てていくのみではなく、一方の運営者にとっても、開館前にあらかじめ市民のニーズを把握し制作プロセスの練習になることを意図しています。

実施することで得られる効果・可能性

運営者の開館前からの事前実践経験

運営者の市内施設へのネットワーク構築

実現する上での課題

運営者・運営組織の早期決定

市内施設での公演へのプロ側の需要

「苦小牧アワード」 市外施設との差異化を図る独自のコンクール



事業内容

施設独自の基準や審査を設けたコンクールは、その施設が持つ固有の価値を創出し、他の施設との差異化を実現します。例えば、千代田区立内幸町ホールが主催事業として行われているシャンソン・コンクールは、単なる審査会のみではなく、コンクールを通じて参加者の普段の活動やひととなり伝えることも目的としています。その結果、参加者が一つの舞台をつくりあげる当事者の一員になることができ、このコンクールをきっかけに歌手同士のつながりができたといいます。この取組を参考に、苦小牧独自の「苦小牧アワード」を定期的で開催していくことで、苦小牧の文化力を底上げしていくという、周辺施設の中での施設の役割を明確にすることを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

施設独自のイベントの創出
 市内の文化芸術活動家の交流促進

実現する上での課題

審査員の選出など運営者の企画力
 スポンサーの捻出

「響きのソムリエ体験プロジェクト」

音響と空間の関係を学ぶ企画



事業内容

「響きのソムリエ体験プロジェクト」では、ホールや練習室によって楽器や声の響き方の違いを体験し、音響と空間の関係を学んでいく企画です。一流のソムリエは、単に高価なワインを提供するだけでなく、顧客の予算や好みを考慮し、状況に合わせて顧客を喜ばせることができます。このプロジェクトでは、単に音響の良し悪しを学ぶのではなく、響き方の違いを楽しみます。

実施することで得られる効果・可能性

積極的な諸室利用
諸室の稼働率向上

実現する上での課題

専門スタッフの配備

「とまこまい文化口座」

文化芸術活動への参加経験が記録され利子ポイントがつく会員システム



事業内容

読んだ本のリストやラジオ体操の出席スタンプが貯まっていくように、自分の活動記録が目に見えるものが励みとなり、さらに貯めたくなるものです。とまこまい文化口座とは、施設を利用する市民が銀行口座を開設するように自身の文化口座をつくり、施設に訪れる度、通帳記入をするようにその活動や体験を記録することができます。一定の活動記録が貯まると、利子として施設内外で利用できるポイントが付与され、例えば一回公演を無料で鑑賞できたり、文化教室に出席できたりと、次の体験へつながります。また、この文化口座では、口座間で情報のやりとりもできます。例えば、演劇に何度も通っている市民には、演劇に関連する情報が届いたり、あるいは、音楽演奏活動をしている市民に、工作サークルとの連携を提案する案内が届いたり、活動・情報・人材バンクとしての機能も備えています。

実施することで得られる効果・可能性

市内全域の文化・コミュニティ施設との連携

実現する上での課題

情報管理の徹底

マッチングサービスを担う人材

「お茶の間フレンズ」

子ども食堂の実施を通じて、子どもたちに安心・成長の場を提供する取組



事業内容

子ども食堂は、経済的な理由から家庭で満足な食事をとれない子どもを主な対象とし、地域のボランティアや寄附をもとに子どもたちに安価で栄養バランスのとれた温かい食事を提供する取組です。新しい施設が子どもにとっての身近なサードプレイスとなるためには、文化芸術活動に特化した取組のみではなく、社会福祉や社会包摂といった観点からの取組が必要です。「お茶の間フレンズ」では、新しい施設で子ども食堂の取組を実施することで、子どもたちに良質な食事をとってもらうことはもちろん、文化芸術活動を通じて、安心して、健やかに成長することのできる環境を提供することを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

施設の来訪機会・リピーター創出
文化芸術に対する興味・関心の喚起

実現する上での課題

子ども食堂の実践を希望する市民ボランティアや食材を提供する生産者の存在

「デコレーション大作戦」

子どもたちの工作が舞台装飾となる参加型のワークショップ



事業内容

音楽や芸術、文化に日常的に接する暮らしが市民に浸透していくためには、幼少期から施設に何度も通いたくなるような環境づくりが重要となります。誰かが発表・展示しているものを鑑賞だけでなく、その舞台や会場を共につくりあげる一員として参加できる仕組みがあると、子どもたちは勿論、その家族や友人も一緒に楽しむことができます。

例えば子どもたちがハロウィンに向けてかぼちゃのランタンを制作する教室を開き、その制作物を展示すると同時に、それらが背景となって演劇や演奏会が催されるといった一連のワークショップを企画します。ものづくりと展示、鑑賞が一体となった企画はあらゆる組み合わせが展開可能で、何度も継続することで定着していくことが期待できます。

実施することで得られる効果・可能性

既存団体や活動の連携

実現する上での課題

ものづくりワークショップと展示・演奏・舞台などを結びつけるコーディネーターと企画発案者の存在
イベントの運営担当者の存在

「とまこまいキッズ基金」 未来のスター育成プログラム



事業内容

子どもたちが幼い頃から継続して芸術や文化に触れる機会をつくることは、将来活躍する人材を育成することにつながり、また市民全体の芸術・文化への関心を引きあげることにもつながります。例えば、小中学生に対して吹奏楽でのホール利用を無料にしたり、自由に使うことのできる大型の楽器を用意したりすることで、日常的に良質の練習環境が確保されます。また、苫小牧出身で現在は第一線で活躍している先輩が定期的に集中講座などを開催し、子どもたちとその親たちの意識を高め、またその気運を次世代へと引き継いでいきます。とまこまいキッズ基金は、子どもたちへの投資は必ず未来に花開くと信じ、地域ぐるみでそれを応援する活動です。

実施することで得られる効果・可能性

子どもたちの親や友人など普段足を運ばない市民が施設を訪れる

実現する上での課題

何をどこまでサポートするのか判断し実施する運営主体

「レベルアップ!みんなの部室」

既存活動の連携と発展を促す施設・設備の開放



事業内容

「レベルアップ!みんなの部室」は、市民が既存の活動を新しい施設に持ち寄ることで、より充実した活動へと発展させることを目指す企画です。例えば、小学校のお楽しみ会で施設のホールを使った楽器の演奏会を行ったり、部活動で中学・高等学校合同の練習会を開催したりと、既存の活動も専門諸室と施設スタッフの助言のもとでより発展的な展開が見込めるものとなります。新しい施設は、市内の教育活動や市民活動が内部で完結することなく、積極的に外部施設と連携することにより充実した活動へ高める拠点とします。

実施することで得られる効果・可能性

既存活動の充実・発展

施設利用機会の増加

実現する上での課題

専門諸室の内容とスペックの検討

専門スタッフの雇用

「週末マルシェ de ライブ」

苫小牧産の食材と市民の文化芸術活動が会うマルシェ



事業内容

施設の外部空間は、文化芸術活動に関心の薄い市民にとっても気軽に訪れることのできる、無目的の利用を促すために重要な場所といえます。「週末マルシェ de ライブ」は、外部空間で行う文化芸術活動への気軽な参加を目的とした無料のイベントです。週末のお昼時に市内の農家や漁師が出店するマルシェと共に行うコンサート、バレリーナの週末ランチを食材と共に紹介するコーナーなど、文化芸術活動に関心のない市民が気軽に足を運び、市民が丸一日施設とその周辺で過ごしても飽きることはない新鮮で臨場感のある充実した内容のイベントを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

文化芸術活動に関心の薄い市民の来訪
市内食材の販売促進

実現する上での課題

市内の農家・漁師とのネットワーク構築の必要性
周辺住民の理解・協力

「ゴーゴーナイトキャンペーン」 夜間の時間帯を利用可能にする試み



事業内容

期間限定で施設を夜通し開放することで、お祭りや合宿のような非日常的体験のもとでの市民同士の新たな交流や文化芸術活動への参画を促していく企画です。新しい施設では、楽器の演奏や演劇の練習など、普段は夜間制限されている活動も許容し、夜間独自のイベントを企画することで、市民の魅力的な余暇環境の過ごし方を提供していきます。

また、仕事を終えた後や学校の放課後といった日常的な余暇活動のための環境整備も、市民の人生を豊かにする大変貴重なものです。そのため、新しい施設では仕事帰りに施設を使えたり、学生がお金をかけずとも立ち寄れたりといった市民のアフターファイブの過ごし方についてもあわせて考え、施設の開館時間を市民のニーズに合わせたかたちにすることを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

市民同士の新たな交流や新しい文化芸術活動への参画
日中施設を利用することができない市民に対して利用機会の提供

実現する上での課題

周辺住民の理解と協力、夜間営業スタッフの存在、夜間利用をすることによる費用対効果

「ふらっとコンサート」 プロと市民が対等に芸術を楽しむイベント



事業内容

文化芸術活動を愛好家向けの崇高なものだと捉える気運は未だ根強く、文化芸術活動の敷居の高さが新しい施設への気軽な来訪を阻害する懸念もあります。新しい施設は全ての市民が平等に利用できることを目指す公共施設の基本に立ち返り、誰もが気軽にふらっと訪れるようにすることが重要です。そこで、新しい施設では苫小牧出身の若手ミュージシャンが鑑賞者を巻き込んでいく参加型の演奏会や市民の楽器体験などの企画を積極的に取り入れていきます。文化芸術活動の作り手と受け手の境界をなくし、プロと市民が対等な関係で文化芸術活動に親しむことのできるイベントは、施設そのものへの敷居の低さを演出することができます。

実施することで得られる効果・可能性

文化芸術活動への気軽な参加機会の提供

実現する上での課題

実施主体の存在

「どこでもアクション実行委員会」

施設全体で設備・備品を管理するコーディネート組織



事業内容

「どこでもアクション実行委員会」は、施設の設備や備品を諸室単位ではなく施設全体で管理し、共用空間も含めた様々な場所で文化芸術活動やイベントが実施されるよう物品をコーディネートしていく組織です。例えば、スタジオにあるピアノや練習室にある鏡などの持運びを可能とし、施設内であればどこでも活動できるようにすることで、いつも施設のどこかで活動が展開されている状態を目指します。また、諸室ごとの管理ではなく、物品を施設で展開する活動に合わせて統括して管理することで、予約の混雑する諸室が生じることを防止し、合理的な物品管理を実現することができます。

実施することで得られる効果・可能性

諸室単位での利用を越えた施設全体での活動の展開
活動内容に応じた合理的な物品管理

実現する上での課題

利用時における物品の運搬といった技術的ハードル
設計段階での綿密な計画にもとづく諸室の柔軟性確保の必要性

「まちなかスタジオ設計室」

空き家・空き店舗を練習室・スタジオへと転用する取組



事業内容

新しい施設は文化芸術活動の発展のみならず、市が現在抱えているまちづくりの課題にも貢献することが期待されます。「まちなかスタジオ設計室」は、空き家や空き店舗といった市内の空室を即席の練習室・スタジオに転用し、文化芸術活動の拠点として活用していくことを目指す取組です。新しい施設では、施設の複合化に伴い、諸室の予約がより一層混雑するなど、施設利用が飽和状態になることが想定されます。一方、現在市街地を中心に、有効活用が望まれる空き家や空き店舗が増加しています。そこで、「まちなかスタジオ設計室」は、新しい施設で予約がとれなかった際の代替案として空き家・空き店舗を活用していくことで、まち全体での文化芸術活動の活性化とまちづくりの課題解決が見込める一石二鳥のアイデアです。

実施することで得られる効果・可能性

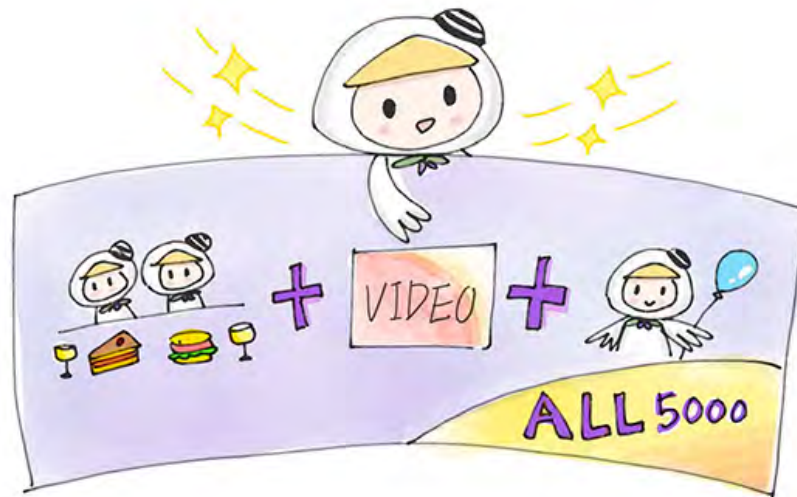
文化芸術活動を通じた中心市街地の活性化
施設利用の混雑緩和

実現する上での課題

専門スタッフの必要性
空き家・空き店舗を所有するオーナーの理解・協力

「CC-PON! (カルチャークーポン)」

商業活動と文化芸術活動をセットで考え企画する団体



事業内容

「CC-PON!(カルチャークーポン)」は、市内の商業活動と新しい施設での文化芸術活動を組み合わせた企画を実施する団体です。例えば、市内の飲食店の割引と公演を組み合わせ、公演だけではなくランチやディナーもセットにした休日一日をトータルでコーディネートしたプランを提案し、バンドの練習とその打上げをセットにした割引料金プランを設けます。この取組では、文化芸術活動だけではなく商業活動の活性化も目的とし、文化芸術活動を通じたまちづくりの可能性を積極的に追求していきます。

実施することで得られる効果・可能性

施設の来訪機会・リピーター創出
文化芸術に対する興味・関心の喚起

実現する上での課題

企画に対するニーズ把握の必要性
市内の店舗や各種機関との連携

「わたしの絵日記プロジェクト」

施設へ足を運び愛着を持てるしくみをつくる体験型学習



事業内容

公共施設の建物や植栽は業者によって管理されることが多いため、利用者があまり気に留めることはありません。しかし、例えばその植栽に市民ひとりひとりが関わると、気になって何度も世話をしに来ることでしょう。苗から育てることで、一年を通じて四季折々の変化を観察し、楽しむことができます。それらは絵日記として記録し、展示することもできます。専門知識を持つスタッフの協力を得て、ガーデニングの講習会を催したり、植物の種類を工夫することで、工作ワークショップの材料として使用したりすることも可能となります。「わたしの」育てている植物が新しい施設の展示の一部となることで、市民が親近感と愛着を持って足を運ぶ機会を創出します。

実施することで得られる効果・可能性

植物に限らず市民が手をかけることにより愛着を持つ仕組みに発展できる

実現する上での課題

技術・管理体制（市民に加えて専門スタッフを配置する必要性）

「子どものわくわく社会見学」

子どもの関心を育み施設のにぎわいを生むイベント



事業内容

多種多様な活動をしたり、利用者が気軽に利用できる施設にするためには、具体的な利用者像を想定する必要があります。例えば、子どもを対象としたスペースは、施設のにぎわいや活気を創出することができる重要な空間です。現在、市内には子どもを連れて自由に遊べる屋内スペースは少なく、その一方で、市内で開催されている子どもを対象とした職業体験イベントは、毎回抽選になるほどの人気企画となっています。そこで、新しい施設では子どもを対象とした職業体験イベントなどを実施することで、子どもの施設への関心を高め、子どもや子連れの家族が気軽に訪れることのできる施設を目指します。

実施することで得られる効果・可能性

利用者層の多様化

子どもが施設を利用することによるにぎわいや活気の創出

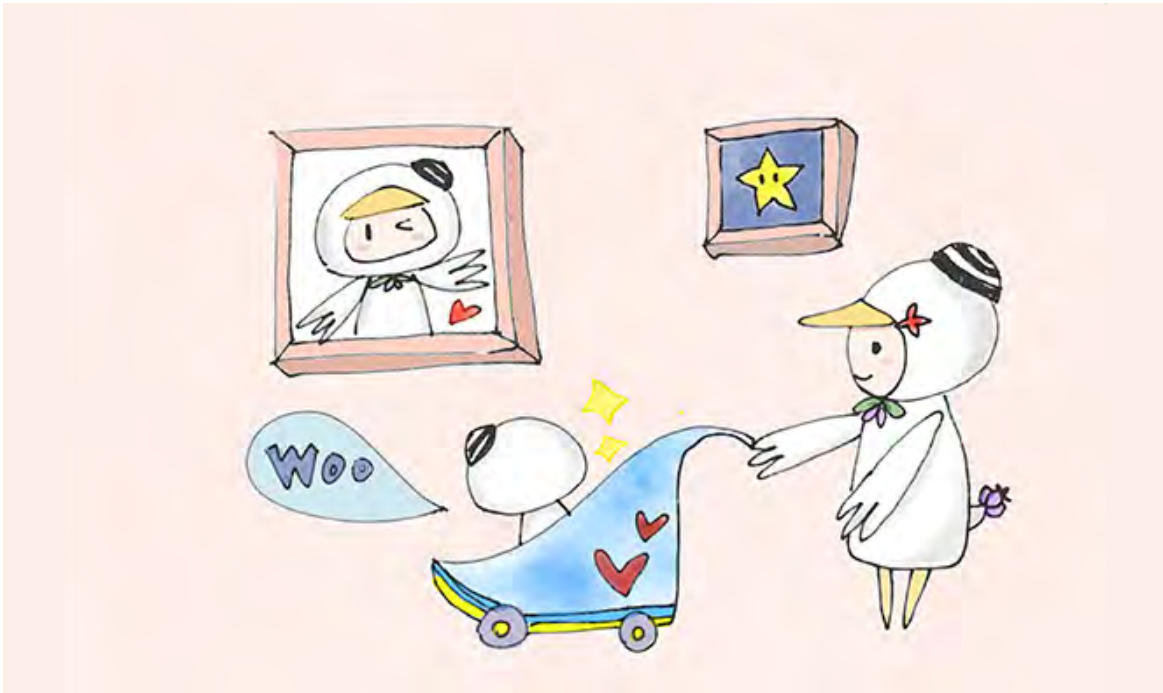
実現する上での課題

子どもを対象としたスペースのルールづくり

怪我や事故に対応できる管理の仕組みづくり

「コドモの止まり木」

子どもと親が気兼ねなく楽しめる体験型の展示・観賞プログラム



事業内容

大きな声を出したり、走り回ったりするなど、特に展示や観賞を伴う公共施設では迷惑になることを心配して出歩けない親子のために、仮設的な空間を作り、そこで展示、観賞ができるプログラムです。例えば、乳幼児は添い寝や授乳なども自由にできる環境で音楽を楽しんだり、小学生は家でゲームをする代わりに情報機器を使って親と一緒に展示作品を作ったり、年齢に応じて必要な空間を設けることで、異なる利用者による活動が共存することができます。

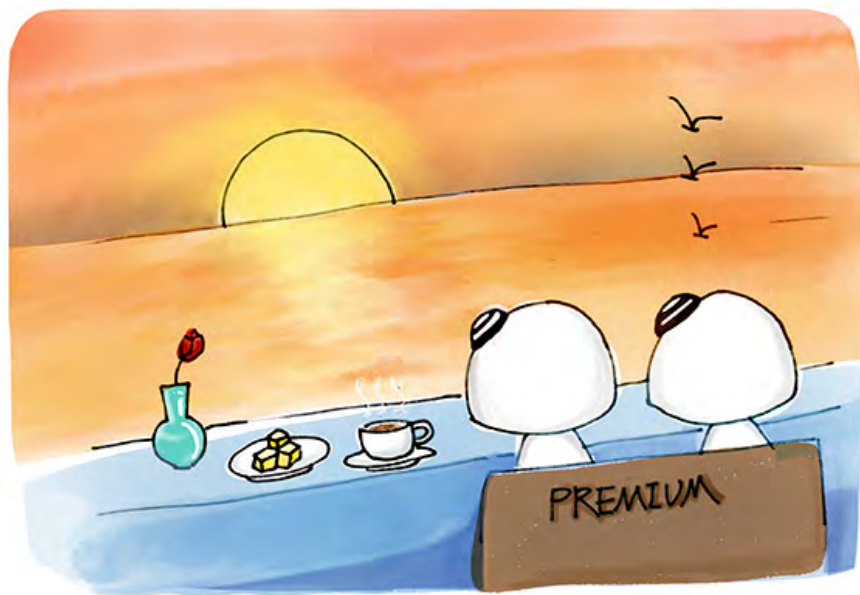
実施することで得られる効果・可能性

施設のにぎわいや活気の創出
文化芸術活動への参画機会の提供

実現する上での課題

仮設空間の設営場所・方法の検討
文化芸術活動との連携企画の検討

「トワイライトカフェ・プレミアムシート」 大人が息抜きできる夕暮れ限定の特別喫茶席



事業内容

いつも仕事や家事で忙しくしている市民にとって、ホッと一息ついて静かに本を読んだり、コーヒーを飲んだりする時間は貴重な非日常体験となります。日中や夜間にはぎわう施設でも、ほんのひと時、子どもたちが帰って夜の活動が始まる直前の夕暮れ時のみ、特別に用意した静かなシートとドリンクを提供します。毎日でなくとも気分を切り替えたい時、一人になりたい時などに訪れる時間限定の場所として、大人のより所となることを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

文化芸術活動に関心の薄い市民の来訪
来訪者の特性に応じた施設利用

実現する上での課題

入替え時間の営業体制

「Living Bar」

いつでも迎え入れてくれるマスターのいる窓口



事業内容

さ細なことで話を聞いてくれる人がいると、特別な用事がなくともふらりとそこへ立ち寄りたくなるものです。「Living Bar」は行きつけのバーのように馴染みのマスターがいて、居間のように落ち着いてじっくり話のできる窓口機能です。専門のスタッフが常にいることで、かしこまらず、相談しやすい雰囲気づくりが可能となります。また、スタッフも窓口専門のスタッフとすることで、他の業務との兼業ではなく市民との対話に専念することができ、施設の管理・運営や企画を向上させることにつながります。

実施することで得られる効果・可能性

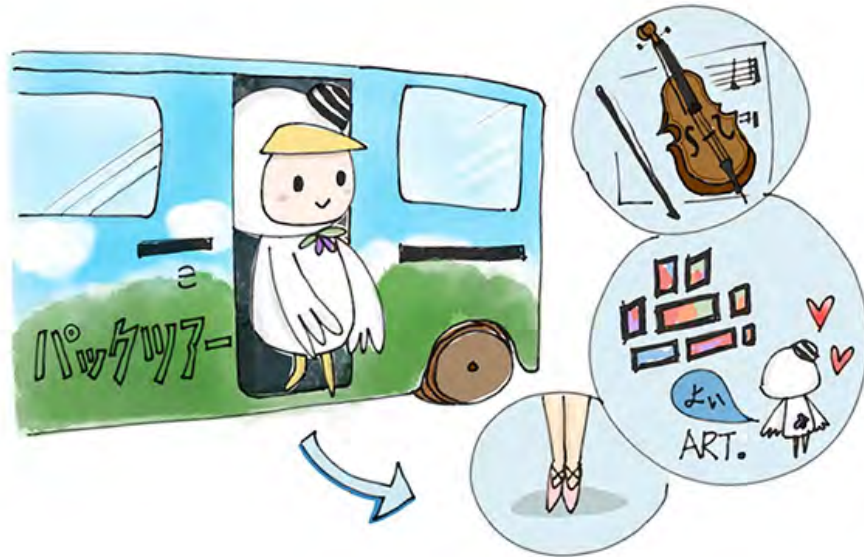
文化芸術活動に関心の薄い市民の来訪
スタッフの専門性をいかした運営

実現する上での課題

施設案内のみならずカウンセリングが可能な人材確保
特定の市民による占有を避ける工夫

「進め!カルチャーバスクラブ」

バス・文化芸術活動をセットで考え企画する団体



事業内容

「進め!カルチャーバスクラブ」は、旅行会社のパックツアーのように丸一日文化芸術を堪能できるツアーイベントや、市内の文化施設をバスで巡る乗車券と文化芸術のチケットをセットにしたプランを企画する団体です。

交通移動手段と文化芸術活動を組み合わせた企画を実施することで、交通手段の心配をすることなくお得に文化芸術を楽しむことができると共に、市内全域での文化芸術活動を楽しむことができます。

実施することで得られる効果・可能性

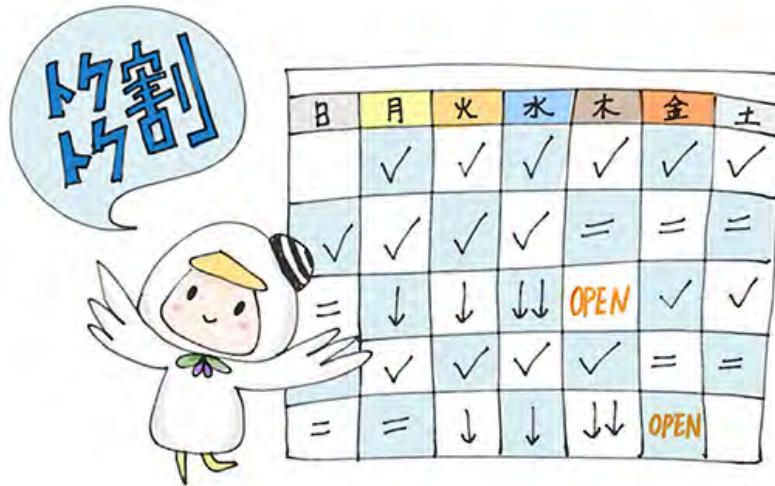
市内全域での文化芸術活動の展開
滞在地へのアクセシビリティの担保

実現する上での課題

文化芸術活動を対象としたツアーイベントのニーズの把握
バス会社などとの連携

「トクトク予約」

利用料金を徐々に下げ利用者の間口を広げる予約サービス



事業内容

文化芸術活動に関心が薄い市民にとって、施設の利用料金やチケット料金など費用の高さは大きな問題です。そこで、可児市文化創造センターで行われている独自のチケット割引システムを参考に、新しい施設では諸室や公演の予約料金を、当日が近づくにつれ徐々に低価格にしていくサービスを検討します。このようなサービスは、利用者にとっては予定を合わせやすいメリットがあり、一方の運営者にとっても空いた席をもう一度売り直せるという、利用者・運営者双方がwin-winの関係になることができるといいます。

実施することで得られる効果・可能性

稼働率の向上

利用者への合理的なサービス提供

実現する上での課題

諸室利用・チケット購入などの予約システムの構築・ルールづくり

「おもてなしフェスタ」

異なる分野や場所で活動している市民が出会う年に一度のイベント



事業内容

市内には、各地のコミュニティセンターや自宅などで小規模ながら趣味や文化・芸術活動に携わる市民が大勢います。そのような市民が新しい施設の共用空間に集まり、普段はできない共同企画や特別な演出を試みるフェスティバルを開催します。例えば、クリスマスのイルミネーションを子どもたちが制作し飾り付け、その舞台ではゴスペルサークルやコーラスサークルがクリスマスソングを披露します。その際、いつも自宅で家庭料理を練習している料理教室の特別企画としておもてなし料理講習会を開き、それらを来場者にふるまいます。年に一度、この時にしかできない新たなコラボレーションが生まれ、参加者も来場者も楽しめる企画となります。

実施することで得られる効果・可能性

市内各所の地域活動のネットワークが生まれる
地域活動のモチベーションにつながる

実現する上での課題

イベントを企画する市民組織とそれをサポートし責任を持つ体制づくり

「寄合いバル実行委員会」

小さなグループ活動を誘発するイベント企画や運営支援



事業内容

市内には有志による音楽サークルや趣味の活動グループが多数あります。規模は決して大きくありませんが、隣の学校の同級生とチームメイトになったり、憧れの先輩とセッションができたりと、小さなグループの中にも、普段所属している学校や会社、年齢などの垣根を越え、地域に根差したつながりが生まれています。このような小さな市民活動の萌芽や持続的な活動を支えるのが「寄合いバル実行委員会」です。例えば、元吹奏楽部バルと題して、これまで眠っていた楽器を持ち寄り、当時の部活の話や簡単な練習で盛り上がる会を開催するなど、知合いが身近にいなくとも、小さなグループ活動に関わるきっかけを提供します。また、有志による活動を持続するアドバイスなども行います。

注) バル：スペインの日常的な社交の場であり、喫茶店・軽食堂・居酒屋を兼ねたような店のこと

実施することで得られる効果・可能性

市民が無理なく地域に関わる導入の機会づくり

実現する上での課題

イベントへの協力や広報の体制づくり

アドバイザーの確保

「カルチャーフェスティバル」 市の魅力をアピールする祭りと連動したイベント



事業内容

新しい施設は市民の芸術活動の場としてのみではなく、地域活性化の一端を担ったり苦小牧の魅力を発信したりと苦小牧市民が誇りを持てるような地域に根付いた施設にしていくことが重要です。そこで、すでに行われている祭りや連動したイベントを行うことで、地元市民のための施設づくりや地元で根付いた活動を展開していきます。また、このイベントは市民のみを対象にするのではなく、お祭りを目的に訪れた観光客に対しても苦小牧の魅力を発信するよい機会です。祭りや連動したイベントの実施をとおして、新しい施設がよりよいまちづくりへ積極的に貢献することを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

一度も訪れたことのない市民への来訪のきっかけを提供
祭りを通じた芸術分野のジャンル間をまたいだ交流の促進

実現する上での課題

既存のお祭りへの介入余地の有無

「紅白コミセン合戦」

コミセンごとの各種サークル・団体が年に一度集結するイベント



事業内容

現在、市内にあるコミュニティセンターでは施設ごとに各種サークル・団体が活発に活動を行っています。「紅白コミセン合戦」では新しい施設で年に一度、市内のコミュニティセンターの各種サークル・団体が一同に集結し、コンクールを開催します。楽器演奏や舞踊といった実際の活動内容を紅白対抗形式で披露することはもちろん、施設独自の取組やユニークな活動の紹介なども評価する独自のコンクールとすることで、市内の文化芸術活動のより一層の活発化を目指します。

実施することで得られる効果・可能性

既存コミュニティセンターでの活動の活性化
新しい施設利用の機会創出

実現する上での課題

コミュニティセンターとの連携

「びっくり箱プロジェクト」

当日までプログラムが明かされることのない年に一度のビッグイベント



事業内容

施設独自のイベントは、その施設の個性を創出し他の施設との差異化を図ることができます。新しい施設は複合施設であり、様々なジャンルの文化芸術活動が一つの施設に集合していることが強みとなります。そこで、新しい施設では芸術祭やアートフェスティバルなどのイベントをアレンジし、演奏会の日程は告知をするが当日までプログラムが明かされることのない施設独自のイベントを行っていくことを検討します。イベントの仕組みは金沢市民芸術村の市民ディレクターの仕組みを参考に、イベントの企画から実施まで市民が積極的に関与していくことを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

施設の目玉となるイベントの創出
市民の企画力・実行力の育成

実現する上での課題

市民ディレクターの人材確保

「シアター de アフターパーティー」 公演後の打上げを関係者と観客で共有しあうイベント



事業内容

「シアター de アフターパーティー」は、公演後に観客と打上げをし、公演達成の喜びを関係者と観客で共有しあうイベントです。打上げは一般には関係者のみで行われますが、このイベントでは関係者だけではなく、公演を鑑賞した市民も参加可能とすることで、関係者は公演の感想や反応を直接受け取ることができます。また、鑑賞した市民が公演の関係者と直に交流を持つことで、さらなる文化芸術の輪の広がりや展開が見込めます。

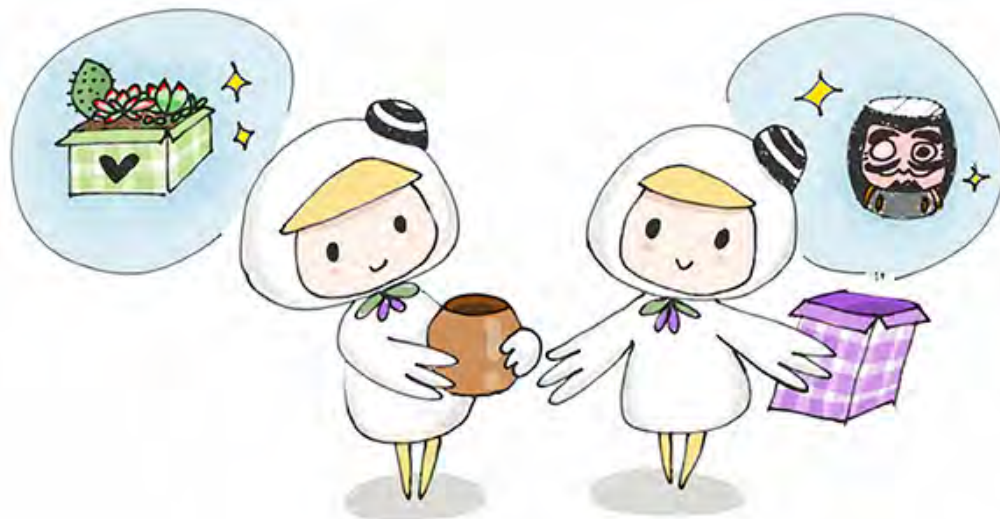
実施することで得られる効果・可能性

施設独自のイベント創出
文化芸術活動家の交流促進

実現する上での課題

柔軟な諸室利用のルールづくり

「もったいないプロジェクト」 創作活動に必要な物資を調達する活動



事業内容

「もったいないプロジェクト」は、文化芸術を通じて不用品に新しい価値を見出していく活動です。例えば、畳縁の切れ端を人形作者の市民が受け取り、業者にとっては不用品である物が人形の飾りとして再利用されたり、市民から集めた不用品でアーティストが都会の一角を表現した舞台美術を作成したりします。この活動は、不用になった物を施設に持っていくついでに文化芸術に触れる機会を創出することができると共に、創作活動に必要な物資を調達することで、結果的に文化芸術を媒介とした市民同士のコミュニケーションを促進することができる一石二鳥のアイデアです。

実施することで得られる効果・可能性

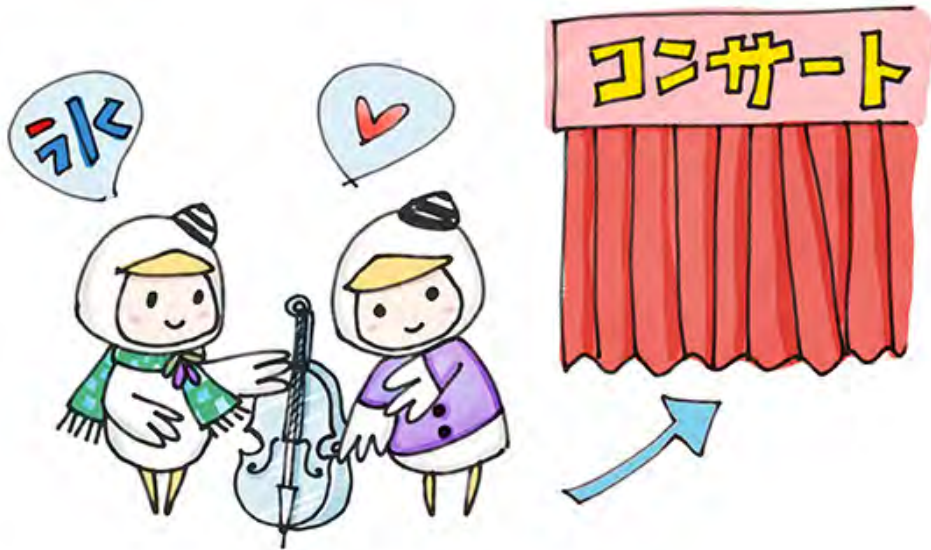
施設の来訪機会・リピーター創出
文化芸術に対する興味・関心の喚起

実現する上での課題

リサイクルプラザとの連携

「北の歳時記～アウトドア展示推進企画室～」

屋外イベントと展示を結びつける企画



事業内容

屋外における賑わいは、普段文化施設に足を運ばない市民にとって、来訪の敷居を低くする一つの要素です。そこで、展示機能においても屋外を積極的に利用します。例えば、月の満欠けの観察会とそれにちなんだ作品を制作・展示するイベントや、ニューイヤーコンサートと雪を用いたキャンドルの飾付けといった、市民による制作や文化講座と連動させた展示を企画します。また、暖かい季節には、制作スタジオの一部を開放し、屋外スタジオとして日曜大工や子どもたちの遊び場作製など、屋内と屋外を効果的に活用し、それが展示につながる仕組みをつくります。このような展示を企画する組織には美術や技術スタッフがアドバイザーとして参加し、市民によるイベント企画などを技術面で支えます。いつ足を運んでも季節が感じられるといった、地域の魅力を発信する取組です。

実施することで得られる効果・可能性

施設の賑わいづくり

文化芸術活動への興味・関心の喚起

実現する上での課題

鑑賞や活動機能で展開される企画との連携

技術・美術スタッフの養成

②

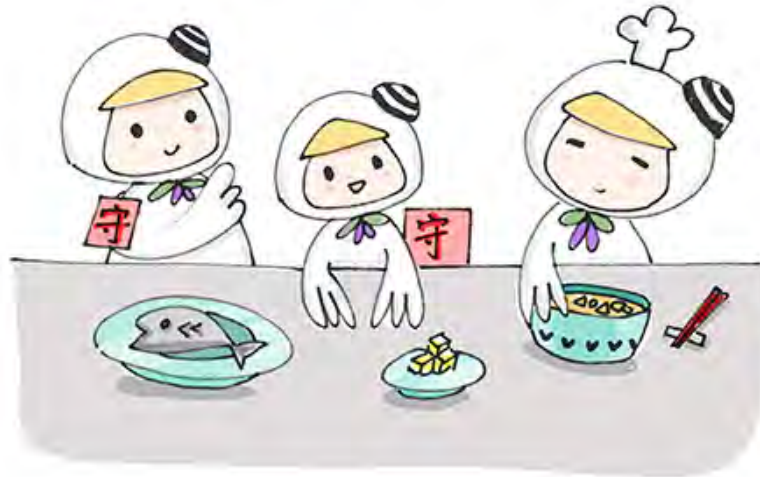
集う

展

北の歳時記～アウトドア展示推進企画室～

「苦小牧の味を守る会」

地域に根差したソウルフードを楽しみながら伝える市民団体



①

ま

話

知る
苦小牧の味を守る会

資料編

事業内容

歴史上又は芸術上価値の高い演劇や音楽、工芸芸術など文化的所産のことを無形文化財といいますが、祖父母から伝えられる郷土料理や長年地元で愛される定食屋の料理、地域に根差した名物B級グルメといったその地域特有のソウルフードも継承すべき無形文化の一つといえます。

「苦小牧の味を守る会」は、苦小牧に伝わる各種のソウルフードを市民みんなで調理し、楽しみながら伝えていく市民団体です。活動は料理の取材から始まり、料理教室型の小さなイベントから大きなフェスティバルまで、大小様々な規模で展開していきます。

実施することで得られる効果・可能性

生活に密着した文化芸術活動の展開

文化芸術活動への興味・関心の喚起

実現する上での課題

持続的な活動・イベント開催を企画する実施者の存在

「〇×デー」

各機能の個性を際立たせる特集イベント



事業内容

新しい施設では、複合化により様々なジャンルの催しが可能となり、バンド・オーケストラ・バレエ・ヒップホップダンスなど多数のジャンルが一つの施設を利用することを活かしたイベントを行っていくことが必要です。一方で、複合化に伴い、各諸室の予約が重複し、利用団体によっては施設が使いづらくなってしまう懸念もあります。

そこで、映画館にある〇×デーのようなテーマを持たせた催しや割引料金サービスを参考に、複合施設だからこそ可能な多様なイベントの創出を検討していきます。また、テーマとなったジャンルの利用団体に対しては諸室予約の優先等を行い、全てのジャンルの団体が偏りなく施設を利用することが可能になります。

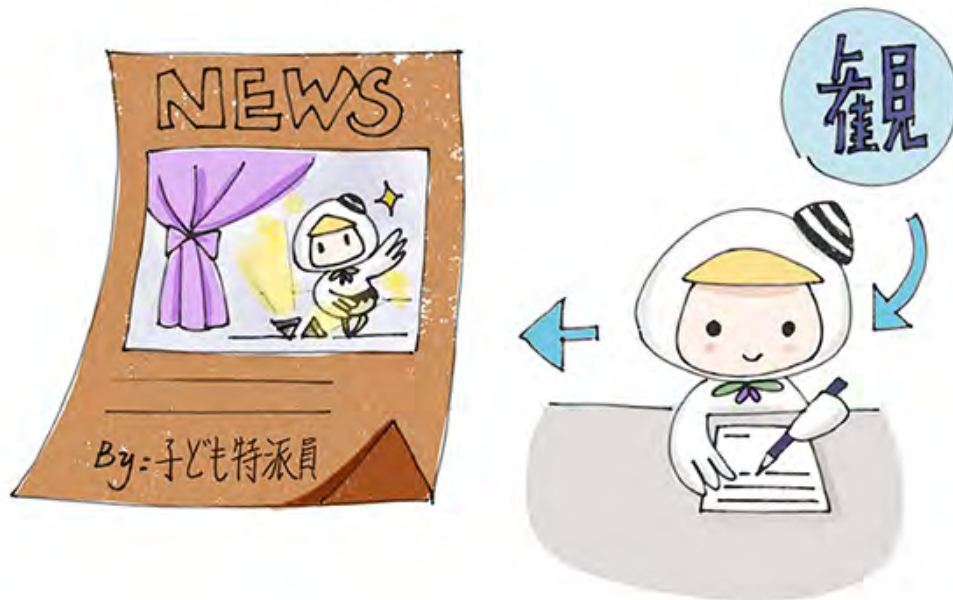
実施することで得られる効果・可能性

複合施設独自の個性創出
芸術分野のジャンル間の交流促進

実現する上での課題

優先利用システムの構築・ルールづくり
イベント実施者の存在

「教えて!子ども特派員」 人と人をつなぐ顔の見える情報案内



事業内容

新たな施設では、常に新しい情報を発信することを目指しますが、単にイベント情報の案内をするだけでなく、人と人をつなげる情報提供の仕組みを提案します。例えば、子どもたちが舞台の制作・稽古の過程、演者の人柄や役作りに迫るインタビュー、観賞した感想などを一連の記事にすることで、記者となった子どもたちや取材を受ける演者、また情報を受け取る市民にとって、その舞台がより身近になり、関心が高まることが期待できます。

実施することで得られる効果・可能性

教育活動との連携

文化芸術活動と市民の距離が近づく機会の創出

実現する上での課題

子どもたちの取材・編集作業を支えるスタッフの必要性

③

情

展

知る
教えて!子ども特派員

資料編

「誰でも印刷工房」

プロが教える広告デザインと印刷技術



④

知る
情報
展

誰でも印刷工房

事業内容

広告作成をしたくても、その方法が分からない市民のために、印刷業者と連携して広告デザインや印刷の技術を学ぶプログラムを提供します。参加者が広告を作る過程で、一定期間施設へ通うことになり、情報交換が生まれます。また、作成した広告はメインの掲示板に掲示できるなど、市民自らが情報発信にける意欲を高める仕組みを取り入れます。

実施することで得られる効果・可能性

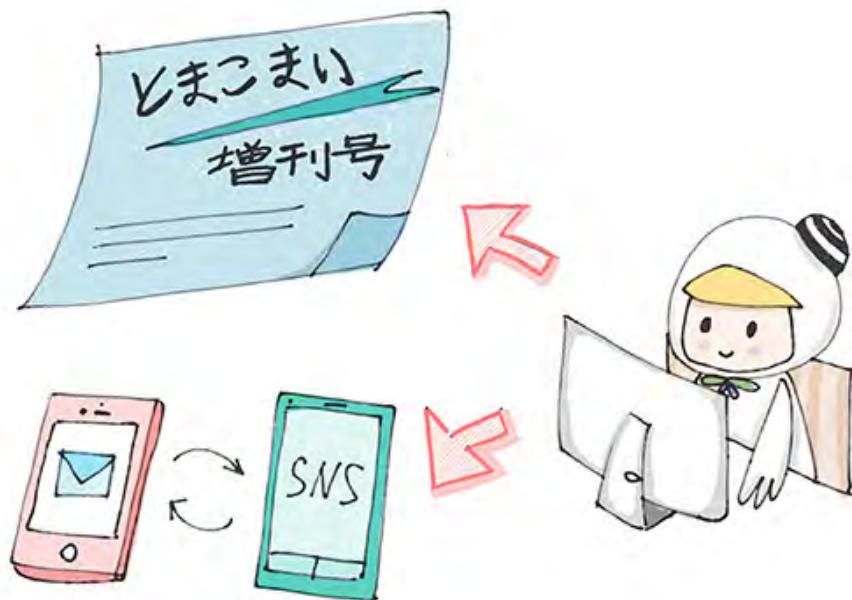
施設の来訪機会・リピーター創出
市民の情報発信力の向上

実現する上での課題

技術提供が可能な企業や個人との連携
資金的サポート体制

「広報とまこまい増刊号 文化編集部」

広報とまこまいと連携した市民編集部員による文化情報誌制作



事業内容

広報とまこまいは、市民の貴重な情報源として親しまれていますが、記事の締切日が早いことや、誌面量の制限により詳細な内容を掲載することが難しいこともあります。新たな施設では、この広報の増刊号として文化・芸術活動、地域活動に特化した内容を市民が編集します。例えば、広報でイベント予告がされているサークルへの取材や、公演が予定されているホールでの練習風景の紹介など、市民の関心を引きつける内容を掲載します。また、SNS等のメディア発信を連動させ、最新情報の提供に努めます。全戸に配布される広報の情報発信の強みと、通常の情報誌とは異なる角度で市民自らが取材する増刊号の面白さを融合させた編集部です。

実施することで得られる効果・可能性

日常的な情報誌と連動した文化芸術活動への関心の喚起
広報の内容をより詳細に補足できる相乗効果

実現する上での課題

広報とまこまいとの連携
編集スタッフの勤務体制の検討

⑤

ま
窓

知る
広報とまこまい増刊号

文化編集部

資料編

「とまチョップ・アート&カルチャーポイント」 施設への来訪を促すポイントサービス



事業内容

無目的利用を促すために重要なのは、文化芸術活動に関心が薄くともまずは施設に来てもらうためのきっかけづくりです。「とまチョップ・アート&カルチャーポイント」は、現在市で実施しているとまチョップポイントと連携したサービスです。とまチョップポイントは、市が主催する事業・イベントへの参加や公共施設の利用でポイントが貯まるサービスです。新たな施設でも、コンサートや公演を鑑賞した際や、各種練習やイベント参加時にポイントが貯まることはもちろん、例えば施設に来訪したことを SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)に告知するとポイントが貯まるなど、施設来訪のきっかけとなるサービスを提供していくことを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

文化芸術活動に関心の薄い市民の来訪

実現する上での課題

とまチョップポイント事務局との連携
ポイント獲得の条件設定

「特別公開!裏方の世界」

本物の技術を体験し老若男女の好奇心をくすぐるバックヤードツアー



事業内容

普段は見ることのできない舞台裏を見学したり、音響や大道具など舞台の裏方が行っている仕事を体験したりするバックヤードツアーは、単なるイベントとしてだけではなく、舞台そのものへの関心も生むリピーター創出の効果があります。

バックヤードツアーを体験すると、舞台装置が実際に使われている様子を公演の場で確認したいと思うようになったり、鑑賞だけではない公演を支えるサポーターとしての楽しみややりがいが増えたりするといいます。

子どもに限らず、大人も楽しめる体験型ツアーは人気企画としての継続が期待できます。

実施することで得られる効果・可能性

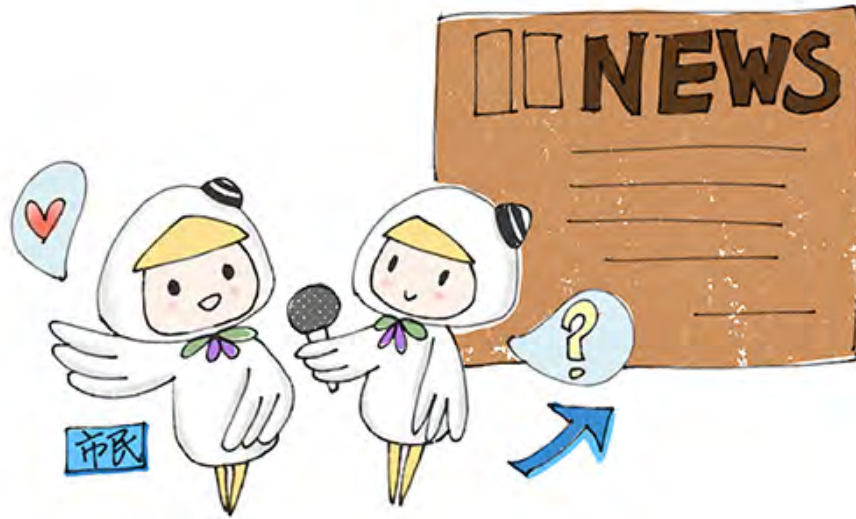
既存複合検討施設で既に実施しているため、体制さえ整えることで実現の可能性が高い

実現する上での課題

イベント実施者の存在

「とつげき新聞部」

まちの魅力を市民自ら調べ、発信するイベント



事業内容

このイベントでは、地域で関心事となっている題材について、実際にまちにくり出し、関係者や有識者に取材をし、資料を収集しながら壁新聞を作成します。「自分のまち」という全ての市民にとって身近なテーマであるので、イベントには小学生から退職後のシニアチームまで世代を超えて参加することができます。作成した壁新聞は、市民による手づくりのかわら版として施設に展示されます。その後、その内容を再構成して物語を作成し、演劇を上演するなど、市民の関心事をあらゆる文化芸術活動へと結びつけ、市民自らが施設をいきいきと活用する利用者になってもらうことを目標にしています。

実施することで得られる効果・可能性

情報発信

SNS などへの展開

実現する上での課題

市民の関心事を文化活動へ結びつけるディレクターの存在

「サイン考案部」

ついで利用を促すサイン・サイネージを市民自らプロデュースする組織



事業内容

新たな施設へのついで利用を促すために重要なのは、用事の合間に文化芸術に対する関心を喚起し、実際に市民を活動へと誘っていくための仕掛けや工夫です。「サイン考案部」は、プロやアーティストと共に市民の手で自らサインやサイネージ（電子看板）を作成し、ついで利用が生まれやすい環境づくりを行う組織です。ふと目に止まるサインやサイネージがあることで、普段意識していなかった活動のきっかけになることを目指すと共に、サインやサイネージ自体も一つの表現活動であり、それ自体が文化芸術活動となるような質の高い情報発信を担う組織となります。

実施することで得られる効果・可能性

ついで利用の促進
市民による表現活動の活性化

実現する上での課題

運営を担う市民組織とそれをサポートする体制づくり
専門スタッフの雇用

「図書室 (ライブラリー) de ライブ」 演劇やライブ活動の場となる体験型図書スペース



事業内容

複合施設に図書室機能があることで公演や展覧会といった特別な目的がなくとも施設へ訪れる機会が創出できます。施設独自の図書コーナーを設ける場合、蔵書はホール・美術館・展示などの機能に合わせ、文化・芸術に関するものを中心としたラインナップすることや、さらにイベントと関連した蔵書選定を行うことで機能間の相乗効果も発揮できます。例えば、公演があるときは関連するアーティストの特集コーナーを設け、子どもたちには読み聞かせや即興演劇の企画をするといった活動を行うことで、なんとなく雑誌を読み立ち寄った市民が公演のことを知り、それをきっかけに公演を鑑賞するといったことも起きるでしょう。さらに、図書コーナーそのものがライブ会場となり、蔵書と関連した演劇や生演奏が気軽に楽しめるなど、図書を媒体とした独自の企画を生み出す場となります。

実施することで得られる効果・可能性

機能間の連携拠点として位置付けられる

実現する上での課題

独自の選書や管理をする運営主体の存在

「腕利きサポート部隊」

アーティストとの共同作業で表現の幅を広げる市民ボランティア集団



事業内容

市民ボランティア集団「腕利きサポート部隊」は、市民がやってみてみたいと思ったことをプロ・アーティストの指揮のもと、実現する市民参加型アートプロジェクトです。市民はボランティアとして「腕利きサポート部隊」に登録することで参加が可能となります。例えば、新たな施設のロゴデザインやイメージカラーを担当したデザイナーが、それらを使った市民活動のチラシやポスター・Web制作の指導をすることで、市民は効果的な広報を安価で実現することができます。また、他には市民による椅子の設置や屋外植栽の提案を家具職人やランドスケープデザイナーと一緒に作りあげるなど、多種多様な活動が考えられます。それぞれの得意技を活かし、互いの活動を高め合うことのできる専門家と市民の合同プロジェクトとなります。

実施することで得られる効果・可能性

市内出身の若いアーティストが活躍できる場となる
趣味を続けていた市民が退職後に力を発揮できる

実現する上での課題

技術・管理体制

専門スタッフと市民の関係をつくる体制

01

地

活

腕利きサポート部隊

関わる

資料編

「手作り食堂 in 市民プラザ」

地域の方々や子どもたちがスタッフとして主体的に参画することのできるレストラン



事業内容

市民が主体的に参画することのできる場合は、ホールや練習室だけに限らず、施設の中にあるレストランやカフェでも可能です。「手作り食堂 in 市民プラザ」は、市民自らが日替わりで食堂を運営していく取組です。日替わりで作り手が交代していく仕組みを採ることで、市民が気負いなく活動を展開できるようにし、例えば地域のお母さんたちが食堂のスタッフとなったり、小学生が放課後にボランティアスタッフとして配膳を手伝ったりします。この取組では、レストランやカフェが地域に根付き、食を通じた市民間のコミュニケーションの創出を目指します。

実施することで得られる効果・可能性

市民の社会参画の場を創出
食を通じた市民間コミュニケーションの展開

実現する上での課題

地域食堂の実践を希望する市民の存在

「チャレンジショップ in 市民プラザ」

開業を試みる市民が期間限定で出店する実験店舗ブース



事業内容

諸室にフレキシビリティを付加する際に重要なのは、日々提供されるサービスや諸室利用に改良を加えたり、内容を少しずつ変化させたりすることで、来訪者に対して常に新鮮な発見を提供することです。「チャレンジショップ in 市民プラザ」は、開業またはアンテナショップへの出店を希望する市民を対象に、店舗ブースを格安の条件で一定期間貸し出す実験店舗ブースです。先月はパン屋、今月はカレー屋といった具合に、店舗の内容が毎月変わっていくことで、期間限定だからこそ新たにチャレンジできる市民の意欲と、何度も訪れたいくなる来訪者の需要と供給が合致する試みです。

実施することで得られる効果・可能性

施設の来訪機会・リピーター創出

実現する上での課題

開業希望者の存在

③

フ

活

チャレンジショップ in 市民プラザ

関わる

資料編

「共にアクション実行委員会」

施設と市民と一緒に要望・意見を実現していく取組



事業内容

施設の運営にとって、利用者である市民の要望や意見を真摯に聞き入れる姿勢は非常に重要です。その一方で市民も、要望や意見を単に述べるだけでなく、要望や意見を施設運営者と共に実現させていく姿勢が重要になります。「共にアクション実行委員会」は、施設についての要望・意見を募る市民参加型の会議を開催し、そこで出された要望・意見について、それを提示した市民と共に実現させていく取組です。施設運営者と市民が顔を合わせながら要望・意見を実現させるための方法や解決策を考え抜くことで、市民主体の施設づくりを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

市民主体の施設づくりの実現

実現する上での課題

何をどこまで実現させていくかのルール・仕組みづくり
市民の要望・意見を柔軟に受け入れることのできる施設運営者

「NO MORE 交通事故キャンペーン」

交通安全などの啓発活動を文化芸術団体が担う試み



事業内容

交通安全や火災予防などの啓発活動は、日常的に接することでの効果的な周知が求められます。そこで、施設を利用する文化芸術団体にコンサートや公演の前に啓発活動をしてもらうことで、その普及を促進します。啓発活動を行った団体には、利用割引や施設で使えるクーポンが得られるなどの特典を設けます。啓発活動はこれまで交通安全センターや警察などの公的機関、あるいは町内会や意識の高い市民の有志が担ってきました。しかし、このキャンペーンでは、意識の高低とは関係のない市民が啓発活動を担うことで当事者意識が生まれます。結果的に、啓発活動を行う市民、それを目にする市民の双方を啓発することができる一石二鳥の事業になります。

実施することで得られる効果・可能性

既存の啓発活動の普及・発展
施設の利用促進

実現する上での課題

賛同者・スポンサーの確保

「ワクワク展示室」

市民がつくりつかいこなす展示スペース



事業内容

美術館や博物館のように額縁やケースに入った作品の展示方法だけではなく、市民の作品を展示する空間は市民自らが考え、つくりあげることができます。展示空間を手作り形式にすることで、例えば写真を釘で打ちつけて展示したり、子どもたちが絵を画びょうで貼付けたりするなど、気軽に自由な表現が可能となります。また、他の活動やイベントなどと連動させ、人が集まる場所に展示空間を設置できるなど、展示場所自体の自由度も高めることで、展示する側も、鑑賞する側も、作品を身近に感じ、多くの市民の目に触れる機会をつくることができます。

実施することで得られる効果・可能性

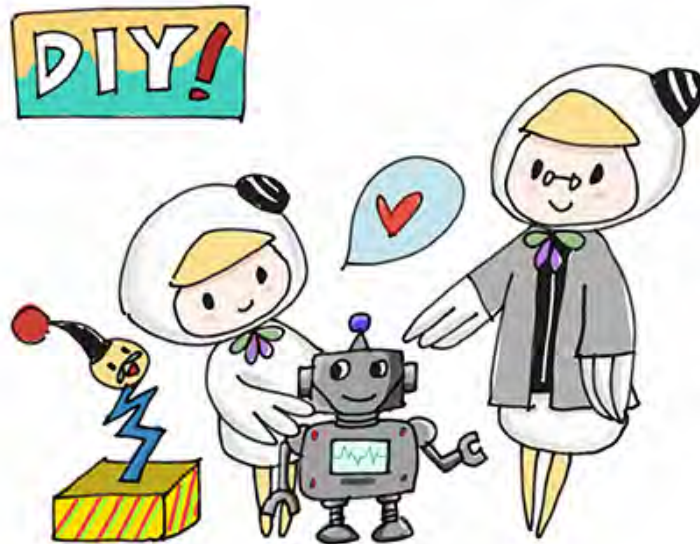
多機能との連携企画

実現する上での課題

作品の管理方法

「DIY 応援部」

市民の主体的な創造活動をサポートする団体



事業内容

市民が主体的に創作活動を展開できるようにするためには、充実した専門機器とそれらの使用方法を説明する専門スタッフが必要です。「DIY 応援部」は、最新の工作機器の使い方をスタッフが事前にレクチャーし、市民の主体的な創作活動をサポートする組織です。また、「DIY 応援部」も積極的にものづくりイベントなどを開催することで、市民によるより高度なものづくりへの実践の機会を提供していきます。この取組では、創作活動を通じた世代間交流や市民同士のコミュニケーションの機会を創出することを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

より高度な創作活動の実践機会を創出

創作活動を通じた世代間交流や市民同士のコミュニケーション機会の創出

実現する上での課題

専門機器の設備投資

専門スタッフの雇用

「いきいきディレクターズ」

共用空間のイベント・雰囲気づくりを担う市民組織



事業内容

共用空間は、様々な市民が訪れ、自由に行き来、滞在できるスペースであることが求められますが、一方で使い方のルールや禁止事項が増えてしまうこともあります。施設全体、特に共用空間の雰囲気づくりや施設が主導するイベントの企画を実施することで、一般的には思いつかなかったような共用空間の使い方を提案することもできます。例えば市民でつくる団体が共用空間のディレクターとして企画の発案や運営を担い、自由な発想で市民がいきいきと過ごすことのできる雰囲気づくりを進めます。行政は、その企画を後押しする役割として禁止ではなくどのようにすれば実施できるのか解説策を考え抜き、企画の成功へつなげます。

実施することで得られる効果・可能性

施設企画のイベントや提案から市民発案が活発になる流れをつくることのできる

実現する上での課題

市民組織の存在
行政や他団体との協働

「魅せる事務室」 人と人の距離が近づくシゴトバ



事業内容

新たな施設では、スタッフと市民が互いに声をかけ、安心して過ごせるような関係を築くことを目指します。「魅せる事務室」は、閉鎖的になりがちな事務室をあえて見せることで、市民からの敷居をなくし、施設の仕事への親近感と信頼を得ることにつながります。またスタッフ自身も常に働く場所への気配りと施設全体への関心を持つことができます。スタッフ間でも部署や表方・裏方の垣根なく自然に協働できるきっかけとなることが期待できます。

実施することで得られる効果・可能性

気軽な施設への来訪
部署・機能間連携

実現する上での課題

セキュリティ、プライバシーの確保

「芝生ファンクラブ」

屋外のオープンスペースづくりやイベントを企画する組織



事業内容

芝生の広場のようなオープンスペースは、文化芸術活動に関心の薄い市民にとっても気軽に訪れることのできる場所です。「芝生ファンクラブ」は、屋外スペースを自主的に管理し、そこでのイベントを企画する市民団体です。施設の内部空間ではなく外部空間の管理や運営を市民が担うことで、文化芸術活動に限らない自由な発想をすることが可能となり、市民にとって親しみやすい憩いの場づくりを実践することができます。

実施することで得られる効果・可能性

文化芸術活動に関心の薄い市民の気軽な施設への来訪
文化芸術に限らない活動の展開

実現する上での課題

管理・運営を担う市民組織とそれをサポートする体制づくり

「まちカフェ企画室」 文化を発信する拠点としてのカフェ運営



事業内容

ひとりで本を読みたいとき、公演を鑑賞した後にその感想をワイワイ話したいとき、子どもを遊ばせながらちょっと休憩したいとき、放課後に友達と勉強したいとき・・・新しい施設では、そんなふとしたときに立ち寄ることのできるカフェスペースを用意します。また、カフェ運営者が海外の文化を広めるための本や料理を紹介するイベントを企画したり、施設のオープンを記念した特別メニューを提供したりと、単なる施設内にある喫茶店・飲食店に留まらない独自の活動を実践する積極的な運営方針が求められます。

実施することで得られる効果・可能性

カフェが施設の機能横断的なイベント企画の拠点となる

実現する上での課題

積極的なカフェ運営受託者の存在

「週刊おすすめリレー」

市民による市民のための情報発信・交換サービス



事業内容

施設を訪れてはじめてできる体験や、その場所に行ったからこそその気付きがあると、またそこへ訪れたいくなるものです。新しい施設では、市民がふらっと施設へ訪れたときにいつでも新しい情報を得ることができ、新鮮な発見に満ちた場所を目指すことが重要です。

「週刊おすすめリレー」は、市民が他の市民に届けたい情報を週替わりで発信していく独自の情報発信サービスです。例えば、ヒップホップが好きなDJがダンスに最適な音楽を紹介するコーナーを設けたり、読書が好きな市民がクラシック音楽に関連する本を紹介したりします。市民から市民へとその人独自の視点にもとづいた情報を伝えていくことで、施設への来訪を価値あるものにしていきます。

実施することで得られる効果・可能性

施設の来訪機会の提供・リピーター創出
機能間での連携・相乗効果

実現する上での課題

情報発信を行う市民の存在

「ボランティアコーディネーター協会」

市民の能力や適正に合わせたボランティア活動を引き合わせる組織



事業内容

限られた人材・予算で実施される施設運営にとって、市民ボランティアの存在は貴重であり、ボランティア活動への気軽な参加と参加意欲を高める仕組みや工夫が重要になります。「ボランティアコーディネーター協会」は、人材を募集する施設運営者とボランティアを希望する市民双方がwin-winの関係を構築できるように、市民の能力や適性に合わせたボランティア活動を引き合わせる組織です。組織がボランティア活動の仲介をすることで、施設運営者にとっては自身の業務に専念できるためサービスの向上につながり、一方の市民にとっては自身の能力向上や文化芸術活動へのより一層の活躍ができます。

実施することで得られる効果・可能性

施設サービスの向上

市民ボランティアの意欲・向上

実現する上での課題

施設の希望とボランティア志願者を上手く引合わせることのできるスタッフの雇用

⑬

管
窓

ボランティアコーディネーター協会

関わる

資料編

「大人のいきいきカレッジ」

社会や生活の知恵を受け継ぐ生涯学習機会の提供



事業内容

社会人のスキルアップセミナーや民生委員の勉強会など、大人にも学びの環境が必要です。「大人のいきいきカレッジ」は、職場や地域での活動を担う市民と人生の大先輩であるお年寄りの世代間交流を目的とした生涯学習を楽しむためのイベントです。現在、市内のコミュニティセンターでは長生大学として、高齢者を対象に各種サークル活動や発表の場が設けられています。長生大学で活躍するお年寄りを講師に招き、各種スキルアップセミナーや勉強会を開くことで、日常的には接点の少ない世代間でのコミュニケーションを促すことで、新たな企画や多様性に富んだ活動を展開していきます。

実施することで得られる効果・可能性

生涯学習機会の提供

お年寄りから若者への知識や技術などの伝達

実現する上での課題

お年寄りから学びたい若者の存在

両者を結びつける運営者のノウハウ

①

フ

活

つなぐ

大人のいきいきカレッジ

資料編

「見習い親父バンドプロジェクト」

楽器演奏初心者をサポートし、働き世代のサードプレイスを創出する取組



②

つなぐ

創

活

見習い親父バンドプロジェクト

事業内容

仕事や家事などで忙しい働き世代は、文化芸術活動へ参加する機会は少なく、働き世代が気軽に文化芸術活動へ参加できる工夫や仕組みが重要です。「見習い親父バンドプロジェクト」は、昔やっていたバンド活動を再開するのではなく、楽器演奏を始めるところからスタートするバンドプロジェクトです。講師は地元出身の若手ミュージシャンが行い、年に何度か発表の場を設けます。いつもは仕事で活躍しているお父さんがバンド演奏でカッコいい姿を娘にみせ、それを若い講師が見守るといったように、この取組では、世代間コミュニケーションと働き世代のサードプレイス創出を目標に活動を展開していきます。

実施することで得られる効果・可能性

働き世代のサードプレイス創出
世代間コミュニケーションの促進

実現する上での課題

楽器を始めたいと思っている働き世代の存在
若手ミュージシャンの雇用

「お手軽文化講座」

アマチュア市民が講師を務める多世代交流・文化継承プログラム



事業内容

楽器の練習やダンスのレッスンなど、文化芸術活動には日々の訓練が必須であり、またそれらにより得られた技術は経験者から未経験者へと引き継がれていくものです。「お手軽文化講座」は、楽器やダンスなどのスキルを持った市民が格安でレッスンの機会を提供する講座です。この講座では、これまでアマチュアのプレイヤーとして活躍してきたお年寄りの演奏者が市内の小・中学生に楽器演奏を指南するなど、日常的には接点の少ない世代が文化芸術を通じてコミュニケーションすることも考えられます。また、資格を有していなくても、長年趣味として続けてきた活動を次世代へ紹介し、伝えるレッスンを市民が格安で開催することで、文化芸術活動に敷居を感じている市民に対しても気軽な参加を促すことができます。

実施することで得られる効果・可能性

文化芸術活動の気軽な参加機会の提供
世代間交流の促進

実現する上での課題

講座の価格帯・資格等の仕組みづくり
講師を希望する経験者の存在

「あなたに魅せる公開リハーサル」

練習やリハーサルを公開し施設での活発な活動に見える化する取組



04

定

編

あなたに魅せる公開リハーサル

事業内容

施設の活気やにぎわいはその施設の雰囲気づくりを担う貴重な要素です。そのため、新しい施設では、これまで会議室や研修室といった壁で閉じられた諸室で行われていた活動をオープンに見せ、訪れた市民がその魅力を常に感じる取組が重要です。「あなたに魅せる公開リハーサル」では、演劇やダンス、コンサートなどのリハーサルや練習の様子が公開されており、立ち寄った市民は自由に見学し、その感想や意見を伝えることができます。また、施設を訪れた市民が窓口に声をかけることで、各諸室で行われている活動を体験・見学することができます。これらの取組により、市民は常に施設の活気を感じることができ、一方の文化芸術団体にとっては本番前に市民からのフィードバックを受けたり、団体への新たな参加者を増やしたりすることにつながり、双方にとって win-win の関係を築くことができるものとなります。

実施することで得られる効果・可能性

施設のにぎわいや活気の創出、気軽な文化芸術活動への参画機会の提供

実現する上での課題

公開する活動内容や仕組みの検討、文化芸術団体とのネットワーク構築の必要性

「15の夜～親子の語らい」

文化芸術を通じた親子関係の絆を強めるプログラム



事業内容

「15の夜～親子の語らい」は、思春期の子どもとその親を対象にした芸術鑑賞プログラムです。例えば、その年に15歳になる子どもたちとその親を対象に、母の日、父の日の夜などに無料の演劇鑑賞イベントを設けます。将来のことを悩んでいても言い出せないなど、普段話すことの少ない思春期の親子関係に配慮しながら、少しでも家族で共に過ごす時間を増やし、一緒に観た演劇の話をするといった文化芸術を通じた家族間のコミュニケーションが創出されていくことを狙っています。鑑賞そのものに加えて、家族の記憶に残る一夜を演出します。

実施することで得られる効果・可能性

文化芸術に興味・関心の薄い市民の来訪機会の創出
家族間コミュニケーションの促進

実現する上での課題

諸室利用・チケット購入などの割引システムの構築

⑤

つなぐ

鑑賞

15の夜～親子の語らい

資料編

「施設運営アカデミー」

施設運営に携わるスタッフの連携・育成



①6

つなぐ

ま

窓

施設運営アカデミー

事業内容

文化・芸術活動や地域活動に関わる施設は市内に多数ありますが、それらの活動を連携させ、スタッフの育成を協働で行うことで、相乗効果が期待できます。新たな施設では、施設運営に携わるスタッフを対象とした勉強会、発表会を実施し、各施設における課題の共有や、先進事例の紹介、合同での企画会議など、苫小牧全体における文化・芸術活動、地域活動の活性化を図ります。苫小牧市として一丸となり取り組むべき課題と、各施設の個性を発揮した役割や位置付けについて、スタッフ自身が明確に意識できるほか、施設運営者同士の横のつながりを楽しみながら育んでいく取組です。

実施することで得られる効果・可能性

市内全域での文化芸術・地域施設の連携

実現する上での課題

アカデミーの運営主体となる人材の確保

各施設の協力体制

「なかま to ナカマ」

新しい施設での仲間づくりと活動を支えるクラウドファンディング



事業内容

コンサートを開きたいが資金が足りない、バンドを結成したいがメンバーが不足しているなど、実施したい事業があっても実現しない場面はよくみられます。「なかま to ナカマ」は、市民からやってみたいことを募集し、それらの活動への賛同者を募り実際に共用空間で実施する市民参加型の活動です。例えば、資金難で実現できなかったコンサートを共用空間で実施したり、メンバーが揃い結成がなかったバンドの初ライブを共用空間で行ったりします。クラウドファンディングは、誰かの企画に対して賛同者が資金を提供することで成り立っていますが、ここでは、資金に限らず人材、アイデア、技術なども募集します。ただし、実現がなかった事業は必ず共用空間を使ったイベントを行うという制限を設け、こうすることで新しい施設が仲間づくりや活動の拠点となり、共用空間を常に一定のイベントが行われる空間とすることができます。

実施することで得られる効果・可能性

文化芸術活動数の増加
共用空間のにぎわいや活気の創出

実現する上での課題

クラウドファンディングの仕組みづくり

「文化芸術コンソーシアム」

市内文化芸術活動の分野を超えた交流や連携を目的とした組織



08

つなぐ

ま

編集

文化芸術コンソーシアム

事業内容

「文化芸術コンソーシアム」は、新しい施設を中心に、市内の文化芸術活動団体の分野を超えた交流や連携を目的とした組織です。文化芸術活動の強みを生かした仲間づくり・交流を目的としたイベント・ワークショップの企画や、異なる分野が日常的に協働し、接点を持つことのできるようなプラットフォーム・場所づくりなどの活動を積極的に実践していきます。組織の運営に関しては、凝り固まることのない柔軟な組織づくりを目指し、市民の意見を聞く機会を頻繁に設けるなど、組織の体制や役割を臨機応変に変化することができるようにします。

実施することで得られる効果・可能性

施設の来訪機会・リピーター創出
文化芸術に対する興味・関心の喚起

実現する上での課題

既存の文化団体協議会といった団体との連携の必要性
持続的な活動を展開する組織体制や仕組みの検討

「施設コンシェルジュ」

市内施設のネットワークを活かした施設利用の相談サービス



事業内容

既存の利用予約のシステムは予約する施設に直接来訪し申請を行うものであり、先に予約が埋まってしまった場合は他の手段に頼ることができず八方塞がりになってしまう状態です。市内の公共施設には会議室や練習室などを備えた施設はいくつか存在しており、新しい施設の建設にあたって、積極的にそれらのネットワークを構築していくことが必要です。一か八かではなく、予約が重複した際にも代替案が検討できたり、その他のサービスを提供したりといった予約専門のスタッフを配備することで、子どもや高齢者を含めた全ての市民が等しく市内の公共施設を有効に利用できることを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

市内公共施設の有効活用
市民の公共サービスへの満足度向上

実現する上での課題

優先利用システムの構築・ルールづくり
イベント実施者の存在

「空き部屋活用不動産」

施設の空き室を管理し、新たな利用を促す運用サービス



⑩

定

窓

空き部屋活用不動産

事業内容

どんなに施設の運営やマネジメントを工夫したとしても、予約が入らない空きの諸室は出てくるものです。「空き部屋活用不動産」は、生じてしまった空きの諸室を活用したイベントを考える組織です。これまでの利用履歴や文化芸術団体との日常的なやりとりなどを参考に、空いた諸室をうまく活用してくれそうな団体に企画を持ちかけることでイベントを実施していきます。例えば、音楽練習室が空いた際に、カラオケサークルとピアノサークルに相談し即興のリサイタルを企画するといった具合です。この活動は、単なる空き諸室の解消にとどまらないサークル間の連携や相乗効果を促すことも目的としています。

実施することで得られる効果・可能性

稼働率の向上

文化芸術団体間での連携・相乗効果

実現する上での課題

イベントを企画するディレクターの人材確保

文化芸術団体のネットワーク構築の必要性

市民参加事業

H28.10.23 市民フォーラム

H29.6.3 事業紹介展示

H29.10.21 公開ワークショップ

市民フォーラム(平成28年10月23日開催)報告

<実施概要>

市民フォーラム
未来の憩いの広場、市民ホールを考えよう
 ～新しい複合施設を目指して～ **入場無料**

平成 28年 10月 23日 日 14:00 (開場 13:30)
 市民会館 小ホール (苫小牧市旭町3丁目2番2号)

■ プログラム

第1部: 講演 (14:00～15:20)	第2部: パネルディスカッション (15:30～16:40)
公共施設の役割 講師 衛 紀生氏 (可児市文化創造センター ala 館長兼劇場総監督) プロフィール 可児市文化創造センター ala 館長兼劇場総監督 十数地域の自治体文化行政に関わる一方で、文化庁などで多数の委員を務める	複合施設の市民ホールが目指すもの パネリスト 衛 紀生氏 岩倉 博文 (苫小牧市長) 黒岩 真美氏 (市民ホールワーキンググループ 部会長) 山口 勝次氏 (市民ホールワーキンググループ 部会長) コーディネーター 森 傑氏 (市民ホール建設検討委員会 委員長)

■ 参加申込み
 直接申込み先までお越しいただくか、電話・FAXで氏名・連絡先(電話番号)・参加人数をお伝しの上お申し込みください
 右のQRコードからWebページ (https://www.harp.lg.jp/jfT502je) にアクセスしてもお申込みが可能です
 【申込み締切: 10月17日】

■ お問合せ・申込み先
 苫小牧市 市民生活部 市民ホール建設課 TEL: 0144-32-6071 | FAX: 0144-32-4322 | e-mail: half-junbi@city.tomakomai.hokkaido.jp
 場所: 市役所 4 階 (北海道苫小牧市旭町4丁目5番9号)



可児市文化創造センターala

全ての市民に開かれた「公共劇場」を目指し、社会福祉政策と連携した取組や積極的なアウトリーチ活動を通して、社会包摂・地域貢献の拠点としての劇場を实践する。



館長兼劇場総監督
衛 紀生氏
 えい きせい

可児市人口 : 100,664人(H27.4.1)
 年間来館者数 : 321,938人(H27年度)

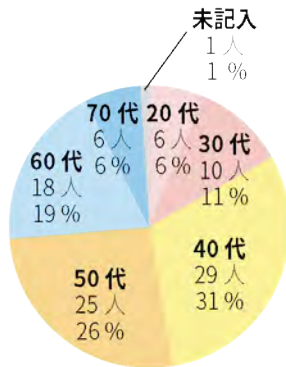
<講演のポイント>

- ① 税金で設置する公共劇場は、文化芸術と社会課題を対応させた取組を行う必要がある**
 alaの大きな特徴は、劇場を社会包摂拠点として捉え、文化芸術活動を通じて地域の人々をケアしている点である。例えば、福祉連合会と連携し、子連れの家族を集めて親子同士や参加者同士の絆を深める演劇ワークショップなどを行っている。税金で設置する公共施設は、単に主催事業を実施していれば良いわけではなく、劇場が担うべき社会的責任を果たさなければならない。
- ② 常識を打ち破ることで、文化芸術から縁遠い市民もリピーターへと転換できる**
 市民にとって劇場は何ができるかを常に考え、その実践のためには既存の常識に縛られてはならない。例えば、alaではチケット割引においても独自の改革を行っており、DAN-DAN チケットという取組では当日券を半額にするサービスを行っている。当日であれば悪い席に当たる確率も高くなるので、観客の合理性を考えれば自然な考えである。既存の常識を打ち破ることで、文化芸術から縁遠い市民も劇場のリピーターへと転換できる。
- ③ 市民やまちにとっての価値を追及した取組を徹底的に考え、実践することが重要である**
 「あそこは特別だから(自分たちの施設ではできない)」と言われることもある。しかし、alaが特別なことをしているわけではなく、徹底して市民やまちにとっての価値を追求した取組を行っているだけである。市民・まちにとって公共劇場が果たすべき役割を真摯に考え、着実に取組へとつなげる姿勢が重要である。

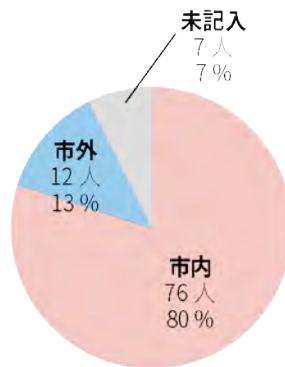
<参加者データ>

参加者数：約200名

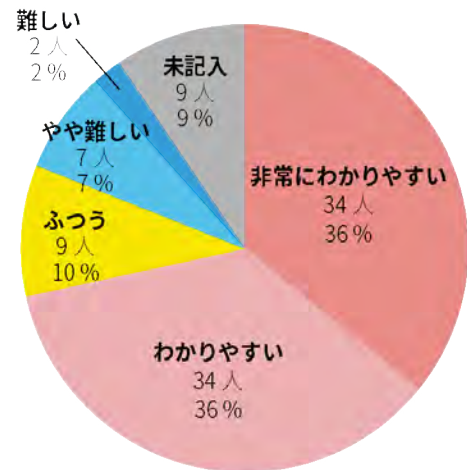
アンケート回答者数：95名



年代



住まい



講演内容

自由記述抜粋 (市民フォーラムで印象に残っていること)

衛紀生先生の講演を再度拝聴したい (50代男性)。ala を知れて良かった。ぜひ苦小牧でも活かしてほしい (30代女性)。公共施設の概念が変わったような気がしています (50代男性)。衛館長の話は興味をひかれるものが多くあったが、一面性のみを伝えられても困る。積み残している手の回らない物についてもお話しただけなら良かった (40代男性)。今日の参加者だけで聞くにはもったいない もっとたくさんの人に聞いてもらいたかった 目からウロコです 見方を変えます (70代女性)。

<当日の様子>



第1部 衛氏による講演



第2部 パネルディスカッション

事業紹介展示(2017年6月3日開催)報告

<実施概要>

開催日時 : 2017年6月3日(土) 10:30~18:30

開催場所 : イオンモール苫小牧
1階ウエストコート内特設スペース

実施内容 :

- ・ 基本構想・基本計画、建設地に係る市の考え、市民ホールが目指すサードプレイスについての説明パネルの展示
- ・ 事業アイデアのパネル展示と来場者の気に入った事業アイデアへのシール投票
- ・ 現市民会館周辺の模型展示
- ・ 来場者へのアンケート

<事業アイデアへの関心>

ワーキンググループ及び検討委員会での議論をもとに作成した63の事業アイデアについて紹介すると共に、来場者の関心の傾向とその理由を把握しました。

事業アイデアは「育てる」「集う」「知る」「関わる」「つなぐ」という5つのコンセプトに分けられますが、関心の高かったアイデアはこのコンセプトの全体に渡っており、特に子どもと大人が共に楽しめる事業に関心が集まりました。また、「食」も文化であるという考え方に共感が得られました。



関心の高かった事業アイデアと意見抜粋

「手作り食堂 in 市民プラザ」 : 134 枚

地域の方々や子どもたちがスタッフとして主体的に参画することのできるレストラン

- ・ 料理教室に興味がある。教えてもらえる。
- ・ 市民会館で働いているが、こういう食堂があったらいいと思う。

「子どものわくわく社会見学」 : 100 枚

子どもや子連れの家族の気軽な施設利用を目指した、子どもを対象とした職業体験等のイベントの実施

- ・ 小さな子どもでも勉強になるし、いろいろな体験ができるし、素晴らしいと思う。必要性がある。
- ・ 子ども目線の取組がいいと思う。

「苫小牧の味を守る会」 : 89 枚

苫小牧のソウルフードを市民みんなで調理し、楽しみながら伝えていく市民団体

- ・ 料理教室で教えてくれるとよい。みんなで一緒に作れると嬉しい。家族にとって良い。
- ・ 苫小牧独自の味があったらいいんじゃないか。

「ソロデビューへの道」 : 86 枚

文化・芸術活動を趣味で行う市民に講習会・個展・発表等の機会を提供するプログラム

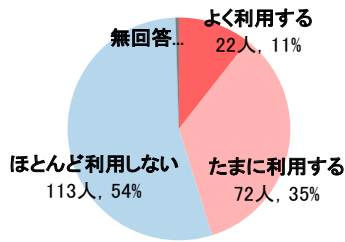
- ・ 習い事をしていても、ホールの舞台に立てるような機会がないので、そういう機会は欲しい。

<参加データ>

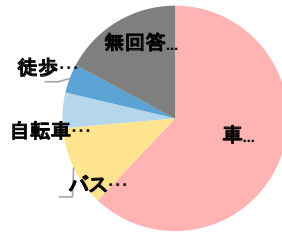
参加者数 : 約 **600** 名

アンケート回答者 : **233** 名 (市内 **208** 市外 **25**)

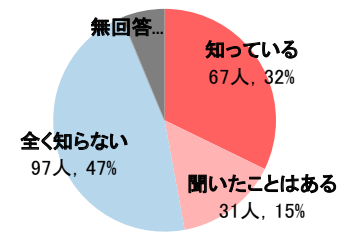
※回答者のうち市内の208名を対象に集計・分析



市民会館や文化会館の利用



交通手段

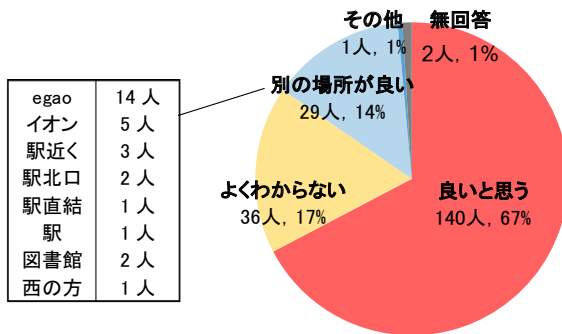


市民ホール建設について

建設地について

検討項目と共に、市の方針を説明しました。

62%以上の方から、市の考えである現東小学校敷地に賛成との意見が得られました。



市の考えに対する意見

市民ホールに望むことについて

飲食スペースや遊び場の意見が多く、その他の意見としては集会スペースを望む意見などが見られました。

作ってほしいもの	回答者数
飲食スペース	135人
図書コーナー	68人
遊び場	81人
談話スペース	39人
その他	14人
- 集会スペース	5人
- くつろぎの場	4人
- 運動スペース	2人
- オープンスペース	2人
- 緑のスペース	1人

新しい市民ホールに作ってほしいもの

<当日の様子>



シールによる投票



模型の展示



来場者への説明

公開ワークショップ(2017年 10月 21日開催)報告

<実施概要>

開催日時 : 2017年10月21日(土) 14:30~17:00

開催場所 : COCOTOMA ラウンジ

実施内容 :

- ・ 基本構想・基本計画、市民ホールが目指す“サードプレイス”についての説明
- ・ ワークショップ
 - 第一部 新しい市民ホールで行う活動の検討
 - 第二部 その活動ができる場所の検討
- ・ 事業アイデア・サードプレイスの説明パネル展示
- ・ 現市民会館周辺の模型展示
- ・ 参加者へのアンケート



<参加者データ>

参加者数: 23名

●ワークショップ参加を通じて今後してみたいこと

回答	人数	割合
家族や知人にワークショップの内容を伝える	19人	83%
市のHPにアクセスし、これまでの検討内容を確認する	4人	17%
ワークショップで知った施設について調べてみる	3人	13%
特になし	3人	13%
その他	0人	0%

●新しい市民ホールに作ってほしいもの

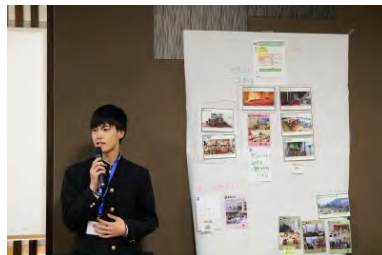
回答	人数	割合
駐車場を広くしてほしい	14人	61%
子どもが遊べる空間が欲しい	8人	35%
カフェや軽食をとることができるスペースが欲しい	18人	78%
勉強や読書ができるスペースが欲しい	16人	70%
その他	3人	13%

●参加者の感想

- ・ こういう話し合いはあまり参加したことがなかったし、自ら意見を出すこともあまりなかったから、参加してよかった。(10代, 女性)
- ・ 税を出す人が減っている中、自分以外の方がどれだけよく思うのか大事なんだって思いました。(10代, 男性)
- ・ 中高生がたくさん参加していたことが印象に残りました。色々な世代の方が、求めているもの、場所が違うことに難しさを感じました。(20代, 女性)



議論の様子



発表の様子



集合写真

<ワークショップの概要>

はじめに、これまでの検討経緯を紹介すると共に、市民ホールが目指すサードプレイスについて説明がありました。次に、二部構成によるワークショップでは、三つのグループに分かれて議論を行いました。第一部ではいくつかの事業アイデアを紹介し、そのアイデアの課題や発展性について話し合いました。第二部では、具体的な事業アイデアを実施する際の諸室やその設備、雰囲気などについて議論しました。最後に参加者が主体となって発表を行い、事業アイデアのイメージを共有しました。

●各グループの議論内容

Aグループ

第一部 市内全域で文化芸術活動を推進するための事業アイデアについて議論が交わされました。実情として市域形状により、中高生が気軽に訪れるのは難しいという意見がありました。一方で、ポイント制の導入により、多くの市民の関心が高まるのではないかと意見もありました。

第二部 とまチョップポイントに関する事業アイデアをもとに議論を行いました。まず、ポイントを貯める場所として、人々が訪れやすいロビー、カフェ等に加え、SNS への投稿でポイントを貯めるアイデアが出ました。貯めたポイントは食堂や練習室、交通機関の利用にも使えろと良いという意見がありました。

Bグループ

第一部 既存施設の良い部分と、今後新たにやりたいことについて意見が交わされました。中高生や市民が気軽に訪れることのできるカフェやモノづくりを応援する仕組みなどに期待が寄せられました。ホールの規模なども含め、人が集まる仕掛けへの関心がみられました。

第二部 モノづくりの場とカフェについて具体的に議論しました。世代を超えた交流や友達と一緒にすることができるよう、周りの部屋と一体的に使われ、外から活動が見える開放的な空間にしたいという意見が出ました。また、カフェはついで利用で気軽に入ることのできる雰囲気、他の活動とつながる情報発信の拠点となることが望まれました。

Cグループ

第一部 各学校の枠組みでは叶わないような機会や設備の提供という面で新しい施設への期待が寄せられました。また、異分野に関心のある市民同士が集う施設において、専門性の確保と共用、共有する意識の双方が必要になることが指摘されました。

第二部 子どもの活動を支える事業に対し、仕切りを自由に移動できる多目的室や、多くの人が集まって意見を言い合える場所などの必要性が挙げられました。また、通りがかった人が関心を持つような部屋のつくり方の提案がありました。更に、食堂、トイレなど施設全体での情報発信の可能性が見出されました。



利用団体への アンケート結果

利用団体へのアンケート結果

① 調査目的

基本計画策定に向けて、現在の文化芸術活動の活動内容の実態及び市民文化系施設の利用状況の把握を目的に、利用団体へのアンケートを実施しました。

② 実施概要

方法：苫小牧市文化団体協議会（文団協）に所属する 167 団体へ郵送及び文化会館を利用するサークルに手渡し

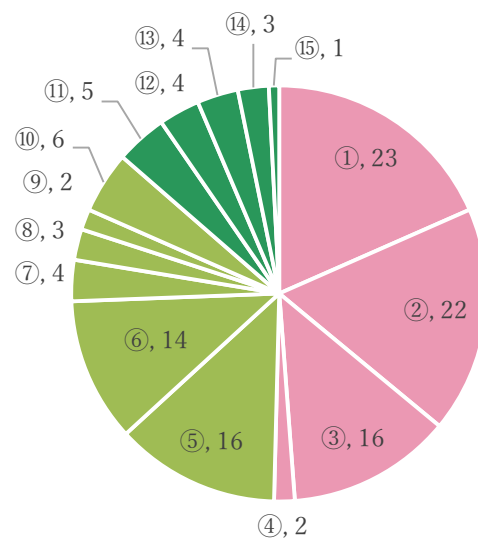
期間：平成 28 年 6 月 1 日～平成 28 年 6 月 23 日

項目：活動内容・活動頻度・利用施設・利用人数・施設を利用する理由など

回答：125 団体

③ 回答団体の属性

鑑賞	①邦楽(舞踊・和楽器・民謡等)	23
	②楽器演奏(中高吹奏楽部・ブラスバンド部等)	22
	③合唱	16
	④演劇	2
	小計	63
活動	⑤ダンス(フラダンス・HIPHOP・バレエ等)	16
	⑥文芸(俳句・川柳・短歌・文学)	14
	⑦手芸・工芸(ステンドグラス等)	4
	⑧外国語(英会話・ロシア語・韓国語教室等)	3
	⑨ヨガ	2
	⑩その他(郷土文化研究会等)	6
	小計	45
展示	⑪茶道・華道	5
	⑫書道	4
	⑬陶芸	4
	⑭写真	3
	⑮絵画	1
小計	17	
合計		125



回答団体の属性

④ 活動内容ごとの利用実態

活動内容を発表会・展覧会、定期練習・定期活動、会議の3つに分類し、それぞれの利用頻度、利用時間帯、利用諸室、利用人数を把握します。

● 利用頻度

定期練習・定期活動は週1回以上、月1回以上の頻度で実施している団体が多い。一方、発表会・展覧会は年に1回以上の頻度で実施する団体が多い。会議を行う団体は少なく、その頻度は団体により異なる。

● 利用時間帯

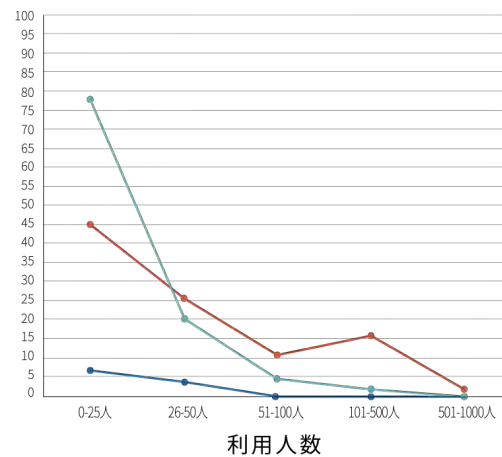
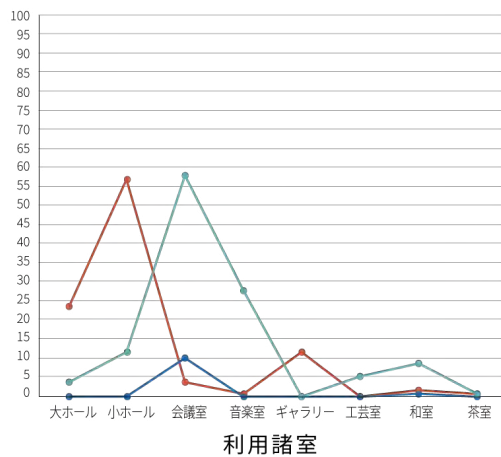
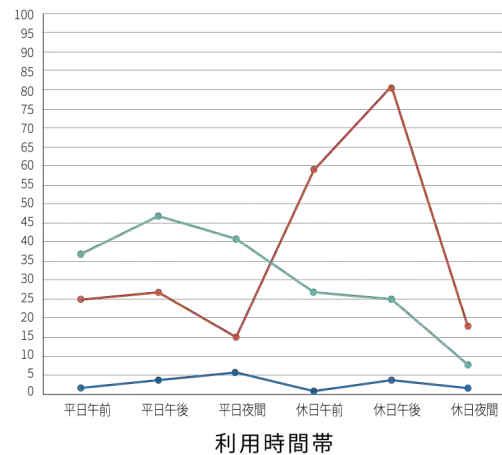
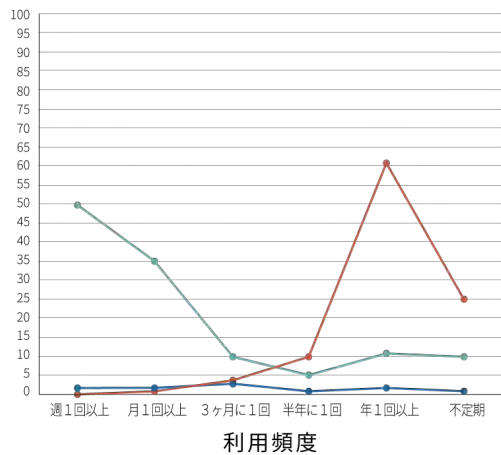
定期練習・定期活動は休日よりも平日行う団体が多い。一方、発表会・展覧会は平日よりも休日に行う団体が多く、夜間以外の時間帯で行う。

● 利用諸室

大規模なホール(501席以上のもの)に比べ、小規模のホール(500席以内のもの)の利用が多い。定期練習・定期活動では会議室を利用する団体が多い。

● 利用人数

全ての活動内容で0-25人の規模で活動する団体が多い。しかし、発表会・展覧会は演者と鑑賞者が混在した回答となっているため、活動の規模の全容は把握できない。



● 発表会・展覧会 ● 定期練習・定期活動 ● 会議
* 単位は回答 (のべ)

⑤ 施設の利用状況

団体が利用する施設を把握します。また、主な複合対象施設である市民会館・文化会館に対し、利用の理由を把握すると共に、施設に対する意見をまとめます。

● 団体が利用する施設

文化会館を利用する団体が多い。その次には、市民会館と文化交流センター(アイビー・プラザ)が挙げられている。

<市民会館について>

● 市民会館を利用する理由

「利用に適した広さがある」と「これまで使ってきた施設だから」を利用の理由に挙げる団体は半数以上存在する。

● 市民会館に対する主な意見

利用料金の高さや設備に対する不満が挙げられた。また、スタッフの対応の良さを挙げる団体もいる。

<文化会館について>

● 文化会館を利用する理由

「立地の良さ」「料金の安さ」「利用に適した広さ」「スタッフの対応の良さ」「これまで使ってきた施設だから」を利用の理由に挙げる団体は半数程度存在する。また、他の理由に比べて、「遅くまで開館している」を理由に挙げる団体の割合はやや少ない。

● 文化会館に対する主な意見

駐車場の不足や予約の集中が挙げられた。また、設備や諸室に対する不満も挙げられた。

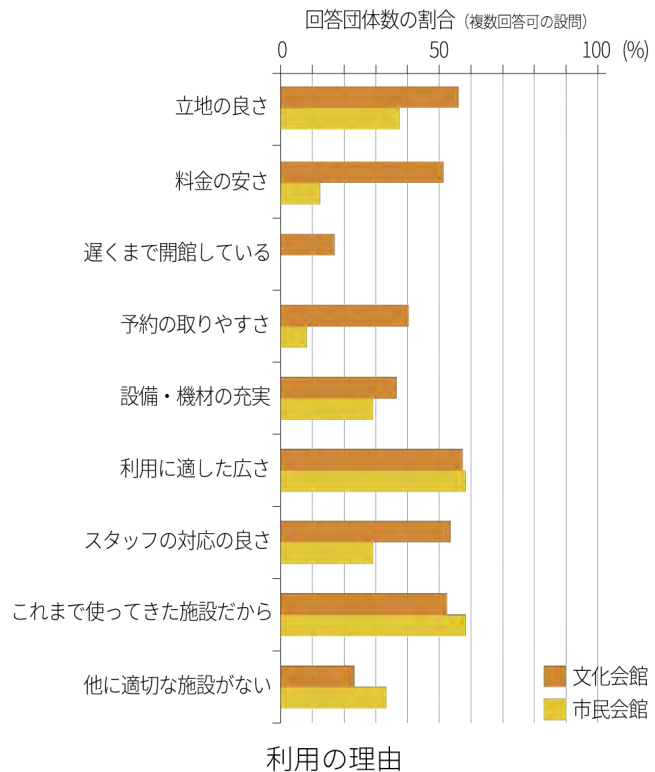
主な複合検討施設	回答数
文化会館	82
市民会館	24

その他の利用施設

アイビープラザ	28
市民活動センター	11
西小学校	4
中央図書館	4
総合体育館	4
男女平等参画推進センター	3
豊川 コミュニティセンター	3
沼の端コミュニティセンター	2
のぞみコミュニティセンター	2
住吉 コミュニティセンター	2
ココトマ	2
植苗ファミリーセンター	1
三ツ星本店ハスカップホール	1
苫小牧道新文化センター	1
美術博物館	1
第八区総合福祉センター	1
明野柳町総合福祉会館	1
グランドホテルニュー王子	1

市外の利用施設

新ひだか町公民館	1
札幌市民ギャラリー	1
島松公民館・里塚美しが丘地区センター	1



利用団体へのアンケート結果

文化会館に対する主な意見

駐車場	常に駐車場が不足している。 駐車場が狭く遠いのが少々問題である。 80歳以上の市民が駐車する場合、利用時間を考慮した上で身障者スペースへの駐車を認めて頂きたい。
予約	最近、ホールの予約がなかなか取れず困っている。方法を再考して欲しい。 予約が取りにくい時がある。 前日に会場を借りないと、午前中からのリハーサルが出来ない。 行事があると予約が集中して取りづらい。 優先的に予約できるシステムがあるとよい。
設備	夏は換気が悪く、 冷房も効かない。 エアコン（冷房）設備が無く、夏使いたくてもホールが暑いので使えない。 空調、クーラー設備を良くしてほしい（第3研修室の真夏は体調不良になるおそれがある）。 照明が暗いのが夜間利用に不便である。 スクリーンの設置、音響の設備が必要である。 コインロッカーが必要である。 窠が古く故障が多い。 今の窠は石油窠ですが、安全面からみても電気窠が望ましい。 棚板、ツク（支柱）等道具の破損品が多い。 備品（展示用器具類、テーブル、イス等）数が不足したり、故障していることがある。 数量、性能のチェックをしてほしい。 エレベータが少し古い。 機械が時代遅れである。 窓から虫が入るので網戸があると良い。 演奏者用の譜面台を新しいものに更改してほしい。 茶室の水屋が狭く、ぶつかりながら歩いている。
諸室	廊下の音が室に入ってくる。 部屋の防音対策（出入口の防音等）、内装材等の充実が必要である。 和室が狭い。 リハーサル室（ピアノ付）が欲しい。 文化会館のホール客席が急に高くなっているので発表する側が困る。 客席からステージへの階段が段差が大きく不安である（特に高齢者）。 座席の奥行がもっと広ければ良い。 ステージ下手側の袖の面積が狭い。 あまりにも 客席数が少なすぎる。 会場の座席数が多すぎるので、 100～200席くらいだと妥当 である。 側面の反響板がないので、音楽ホールとしては使えない。 音響面で舞台袖にも反響板があればいいと思う。 床に段差とすき間があり危険である。 床が滑りやすく困っている。 各階のフリースペースが充実（休憩コーナー等）するとよい。 練習室（鏡のある部屋）をもっと広くして頂きたい。 可能ならば、小さくてもグランドピアノの練習室が欲しい。 洗い場が遠いところが少し残念である。 大きな建物ほど災害等を考えて、複雑な構造にしない様にしてほしい。 老朽化が進んでいるため 自然災害時 に使用している場合、安全性に大きな不安を感じる。
スタッフの対応	スタッフ（受付・技術）の方の対応がとてもよい。 会館スタッフの方々の対応が親切丁寧で大変気持ちよく利用できる。 部屋の施錠は利用者側でなく施設側での対応が望ましい。

市民会館に対する主な意見

料金	使用料が高い（当日リハーサルも備品代がもう一度発生するのに納得いかない）。 もう少し利用料が安くなれば、もっと活用させてほしい と思っている。
設備	新しいホールではエアコンもつけてほしい。 冷房が必要 である。 ステージの反響板をきちんとしてほしい。 コインロッカーが欲しい。
諸室	リハーサル室が必要。 市民会館は客席が多すぎる。 1000席くらいの会場が良い と思われる。 トラックヤードが小さく、しかもドア1枚で外と舞台裏が筒抜けになってしまうので大きな行事（コンクールなど）で困ることが多い。 ステージ横（待機場所）のフローリングのきしみが気になる。 舞台裏の出入り口のドアが小さいので大型楽器が通り抜け出来ず困っている。
スタッフの対応	いつもスタッフの方々には良くしていただき、とても感謝している。

⑥ 利用交通機関

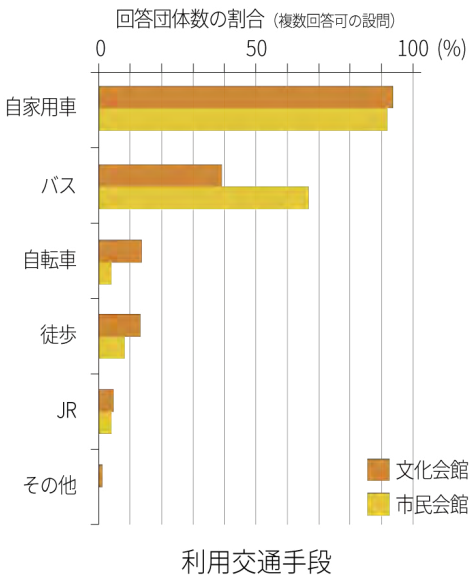
団体が利用する交通手段について把握します。

● 利用交通手段

自家用車を利用する団体は全体の90%程度を占める。また、その次にはバスが挙げられる。その他の交通手段は挙げられない。

● 交通機関の利用内訳

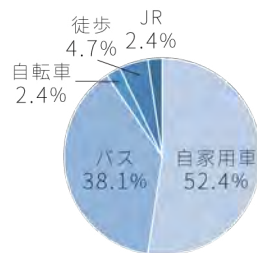
各交通手段の利用内訳を見ると、市民会館・文化会館共に自家用車が50%程度を占め、バスが市民会館では38.1%、文化会館では23.1%を占める。その他の交通手段の利用割合は低い。



交通手段の利用内訳

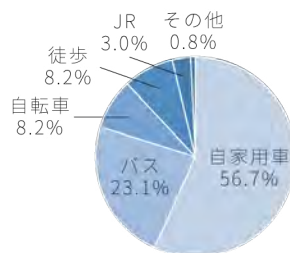
<市民会館>

交通手段	回答数	内訳 (%)
自家用車	22	52.4
バス	16	38.1
自転車	1	2.4
徒歩	2	4.7
JR	1	2.4
その他	0	0
合計	42	



<文化会館>

交通手段	回答数	内訳 (%)
自家用車	76	56.7
バス	31	23.1
自転車	11	8.2
徒歩	11	8.2
JR	4	3.0
その他	1	0.8
合計	134	



用語集

用語集

【頁 | 用語】

i ボリューム

建物が占める空間の大きさ。建物のおおよその規模。(英語：volume)

i サードプレイス

自宅（第一の居場所：ファーストプレイス）でも職場や学校（第二の居場所：セカンドプレイス）でもない、都市に暮らす人々が心の拠り所として集う第三の居場所。(英語：third place)

2 コミュニティ

趣味や関心、居住地域などが一致、共有する人々の集まりで、一体感が抱かれ、相互に関連し合う関係性を指す。(英語：community)

3 パラダイムシフト

発想を転換し、その時代や分野において支配的規範となる物の見方や捉え方、行動などを大きく変えること。(英語：paradigm shift)

3 公共性

特定の集団に限られることなく社会全体に開かれているという観点。公共施設であることの基本に立ち返るための理念。

3 図と地

ある物（図）は、それ単独のものとしてではなく、背景（地）を伴って初めて知覚されることの例え。新しい施設では、市民が訪れる目的となる機能やサービスを（図）としたときに、それだけではなく、目的がなくとも散策し休憩できるような（地）となる憩いの場を生み出すこと目指している。

3 コストパフォーマンス

支出した費用によって得られる成果。新しい施設では、特に、施設の整備にかかる初期費用（建設費など）と運営にかかる費用の適正化を重視し、経営面のみならず、公共性の観点に立ちながらかける努力や労力を惜しまないことが求められる。(英語：cost performance)

3 アクセシビリティ

市民が敷居を感じず、気軽に無理なく使いこなすことができること。また、誰もが安心して利用でき、災害時にも支障なく避難や滞在ができる、利用しやすさのこと。(英語：accessibility)

3 コンテンツ

内容や中身のこと。(英語：contents)

【頁 | 用語】**6 スクラップ&ビルド**

老朽化や陳腐化によって古くなった設備や機能を廃棄し、新鋭のものに置き換えること。(scrap and build)

7 リスクマネジメント

損失や損害をできる限り排除、低減するための経営管理活動。(英語：risk management)

7 モデルケース

(公共施設の適正配置において) 規範となるような事例。(英語：model case)

8 ケーススタディ

具体的な事例を詳しく調べ、(苫小牧市全体の公共施設の整備について) 一般的な法則や理論、手法を見出していくこと。(英語：case study)

31 モチベーション

物事を行う際の意欲ややる気、または動機づけ。(英語：motivation)

31 ハレの場/ケの場

儀礼や祭などの非日常の出来事を「ハレ」といい、例えば、公演や発表会などはハレの場となる。対して、日常を「ケ」といい、特別に予定がなくともついでに利用するなど普段の生活の延長であるケの場としても利用されることを目指す。

32 ソウルフード

その地域に特有で親しまれている郷土料理。(英語：soul food)

33 社会的包摂

市民の誰もが排除されず社会の一員として共に助け合っていこうとする考え方。新しい施設でも、市民一人一人が分け隔てなく平等に参加し、活用できるという考え方を重視している

40 バイタリティ

いきいきとした生命力や活力。(英語：vitality)

41 ゾーニング

施設計画において必要な空間を機能や用途でいくつかのまとまりに区分けし、それらの相互の関係を考慮して適切な場所に配置すること。(英語：zoning)

41 フライタワー

劇場などの舞台の上部に演出に必要な機材などを格納するために必要な高さのある吹き抜け空間で、それがタワー状になるため、フライタワーと呼ぶ。(英語：fly tower)

【頁 | 用語】**42 ポリューム**

前掲を参照 (p.(88), 頁 i)。

42 ビオトープ

生物の生息場所。動物や植物が生活できる環境を造成または復元した場所のことを指す。特に学校では、環境教育の一環として整備される例がある。(英語：biotope, ドイツ語：biotop)

43 バックヤード

ホールなどの裏手で、搬出入や荷捌きなどが必要な空間。(英語：back yard)

52 リノリウムの床

天然素材から製造される床材で、耐久性が高く、また滑りにくいため、公共施設に多く、またダンスやバレエ用としても普及している。(英語：linoleum)

53 パフォーマンスアート

芸術家自身の身体、もしくは人々の動きが作品を構成する芸術。(英語：performance art)

53 アーカイブ

記録保管所の意味で、これまでの貴重な資料、備品などを集めて整理し保存すること。(英語：archive)

54 ハレとケ

前掲を参照 (p.(105), 頁 31)。

54 チャレンジショップ

商売などを始める際に経験や資金がなく、独立店舗での開始が困難な人に対し、家賃や管理費などを一定期間補助し、店舗を貸し出す制度。チャレンジショップを機とした独立開業を支援し、地域に根付く商店を増やすため、全国で実施されている。(和製英語)

55 レイアウト

家具などの配置。(英語：layout)

62 PFI

プライベート・ファイナンス・イニシアティブの略で、日本語では民間資金等活用事業と訳される。公共施設等の建設、維持管理、運営等を民間の資金、経営・技術的能力を活用して行う事業手法。(英語：private finance initiative)

【頁 | 用語】**65 インセンティブ**

やる気を起こさせるような刺激や動機付け。(英語：incentive)

73 モニタリング

事業や運営などの実施状況を観察、記録し、評価すること。(英語：monitoring)

78 SNS

ソーシャルネットワーキングサービスの略で、インターネットを利用したサービスで、個人間のやりとりから社会的なつながりの構築を支援するもの。(英語：social networking service)

(2) ガイドライン

政策や施策、事業などを遂行するための指針や指標。基本構想は価値基準となるもの。(英語：guideline)

(4) アウトリーチ

施設内にとどまらず、自ら施設などに出向かない人々に対し、芸術文化に関心をもたせることを目的として、普及活動や育成事業などを行い、裾野を広げること。(英語：outreach)

(4) 圏域

作用などの及ぶ一定の範囲。例えば市内の他施設との役割分担や連携について、また利用者が訪れる範囲などを検討する際に考慮する。

(4) リピーター

何度も繰り返し利用したり訪問したりする人。(英語：repeater)

(5) マネジメント組織

管理運営組織。(management)

(6) フレキシビリティ

柔軟性や融通性。例えば、目的や用途に応じて部屋が可変したり、利用区分に幅を持たせたりするなどの柔軟な対応を目指すこと。(flexibility)

(6) とまチョップポイント

市内の「とまチョップポイント加盟店」での買い物をした際や、市の事業やイベントに参加した際、また公共施設を利用することで貯まるポイント。

(9) オープンスペース

都市や敷地内で、建物の建っていない土地や空地。建物外部は市民が気軽に訪れやすく、様々な企画を実行できる重要な場所。(英語：open space)

【頁 | 用語】**(9) プロ・セミプロ**

プロとはプロフェッショナルの略で、専門家や本職としてその活動を行う人。セミプロとはセミ・プロフェッショナルの略で、本職ではないが、それに準ずる技芸を持つ人。(英語：professional, semi-professional)

(11) デザインワークショップ

ワークショップとは、参加者全員が自ら経験を披露したり作業をしたりして、参加者同士の相互作用による学びと創造の方法。ここでいうデザインワークショップとは、特に建築の設計を具体的に想像しながら、問題の解決や新たな価値を思考し、互いに概念を組み立てること。(design workshop)

(11) ホワイエ・ロビー

劇場やホールなどの出入りの多い施設で、出入口と客席部分の間にある廊下、休憩所、応接間などを兼ねる広間。特にもぎり位置よりも客室側をホワイエ、外側をロビーとする。(英語：lobby、フランス語：foyer)

(11) グループディスカッション

あるテーマについて、少人数のグループで行う討議。個人が意見を出しやすく、それらをグループ内で相互確認できる点で効果的な手法。(英語：group discussion)

(11) アクセス・アプローチ

アクセスとは、敷地へ至るまでの通路や交通の便。アプローチとは、道路や門から建物の出入口までの通路又は導入空間。(英語：access, approach)

(12) コラボスペース

コラボレーションスペースの略。異なる分野の人が協力し、共同で創造する場。ただ通過するだけの共用空間ではなく、「活動」「鑑賞」「展示」「窓口」といった各機能が積極的に交わる場として用いる語。(collaboration space)

